
怪盗黒揚羽

えんどう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗黒揚羽

【Nコード】

N3236X

【作者名】

えんどう

【あらすじ】

時は昭和30年。世間は「黒揚羽」——金持ちばかりを狙い、犯行前に予告状を送りつけ、人を傷つけないという怪盗の噂で持ちきりだった。実の両親の素性を知らず、養父母に育てられた少年、伊織の部屋に、ある夜強盗が侵入する。実母の形見の手鏡を奪われそうになったところへ現れたのは、伊織の憧れの的である黒揚羽。黒揚羽が言うには、その手鏡には、伊豆の名家の秘宝のありかが隠されているらしいのだが……。ジュブナイルっぽい、レトロな王道探偵小説。ルパンや少年探偵団に胸躍らせていた方、もしくは今も躍

らせている方におすすめです。あとは……クールっ娘が好きな方にも？（とある文芸賞に応募して落選した作品ですが、埋もれさせるのももったいないと思い、こういった形で発表することにしました）

ブローグ（前書き）

あらずじでも触れましたが、昨年某エンタメ系文芸賞に応募し、落選した作品です^^；

原稿用紙換算500枚超。ちょっと長めの単行本程度の分量はあります。

感想、批評等大歓迎です！

プロローグ

広い居間には、二脚の革張りのソファが向かい合わせに置かれている。間にはうつすら緑色がかったガラス天板のテーブル、床には幾何学模様を描いた深紅の絨毯、天井には、釣鐘型つりがねの花をかたどったランプが五つばかりついたシャンデリア。壁際では、線の細いローマ数字の文字盤を掲げた大きな柱時計が、チクタクと時を刻んでいる。傍らにはサイドボードがどっしりと構えており、草花だの果物だのを描いた、華やかな平皿やティーセットが飾られていた。

だが、そんな贅を尽くした部屋で繰り広げられているのは、一家の温かい団欒の光景でも、主人の優雅な休息のひとつでもなかった。

老境に差ししかかった、目も顔も体つきも細長い男が、気難しい顔でソファに腰かけている。両腕両足を開き、威厳をかもし出そうと精一杯努力しているようだが、内心の不安を表すように、その指先はせわしなくももを叩いていた。

隣には、同じ年頃の大柄な婦人が寄り添っている。いや、寄り添っているというほど仲むつまじくは見えないだろうか。若作りでおしろいを塗りたくり、紫の地にクリーム色の百合の花という、派手なワンピースを着ていた。こちらは気難しいというより不機嫌な顔で、胸にビロード張りの宝石箱を抱きしめている。

二人の前には警官が二人、直立不動で立っていた。ぽつぽつと白髪はげの交じった髪をなでつけた、四十代半ばくらいのバタ臭い顔立ちの男と、三十前後の血気にあふれた感じの青年だ。

年かさの警官は、四方に鋭く目を走らせてから、胸ポケットから片手で便箋を取り出し、開いた。

前略　初めまして。黒揚羽と申します。こう名乗れば、野暮な自

己紹介は不要なことでしよう。

このたび、貴女がお持ちのダイヤモンド、「天使の涙」の存在を知り、大変心動かされました。

ぜひ一度拝ませていただきたく、来る六月一日、御宅をご訪問しお借りする所存です。返却の期限は、当方の勝手により無期限とさせていただきますが、あしからず。なお、「天使の涙」が評判に反し二束三文の駄物であった場合は、このかぎりではありません。

それでは、当日を楽しみにしております。

草々

五月二十五日

黒揚羽

高遠登志子様

平凡な白い便箋だが、特徴的なのは、余白に黒い揚羽蝶の紋章が入っていることだ。印刷されたものではなく、専用の印で捺したもののらしい。

「まったく、ふざけた真似をする」

いらだちと呆れの混じった声で言い、警官は便箋をつまんだ指に力をこめた。便箋にわずかにしわが寄る。

そう、ソファに腰かけている婦人こそが、この予告状を送られた張本人、高遠登志子である。隣の男はこの館の主で某省の大臣、高遠義彦、年かさの警官は警視庁の副總監の工藤、若い警官は警部補の丹羽^{にわ}という。

現在、六月一日午前三時。工藤と丹羽は、前日の九時ごろからここで待機していた。当のダイヤモンド、「天使の涙」は、登志子の抱えている宝石箱の中にある。三十カラットを超える、高品質の洋梨型の白色ダイヤモンドで、革命まではロシアの大貴族が所有していたという由緒ある宝石だった。登志子夫人はこれを首飾りに加工し、パーティのたびに胸元で輝かせていたのだ。決して服装の趣味がよいとは言えない登志子夫人は、しばし陰でほかの出席者たちの

失笑を買ったこともあったが、このダイヤモンドだけは、掛け値なしの賞賛と羨望の眼差しで迎えられていた。

「早く来ませんか」

丹羽が焦れたように軽く体を揺らした。

「馬鹿。不謹慎なことを言うな」

工藤がいさめた。内心では、彼も案外同じことを思っているのかもしれないが、高遠夫妻の手前おくびにも出してはいない。

「ははは、これは頼もしい」

高遠が笑うが、笑い方には覇気がなく不自然な感じもする。

対して、登志子はきつと目を吊り上げて、

「頼もしいじゃありませんわ、あなた。こうやって、今まで何人の方々が被害に遭ったと思ってるの」

「おい、刑事さん方の前で、そんなことを言うものじゃない」

高遠は登志子と二人の警官、双方に気を遣うように、身をすくめながら言った。気の小さい高遠が大臣にまで上りつめたのは、夫人の内助ないじょの功（などと呼べるようになつた）まいしいものではなかったとしても）であるというもっぱらの噂であり、彼は完全に尻の下に敷かれているのであった。

「いえ、奥様のおっしゃることは真実ですよ」

工藤は感情を害したふうでもなく、さりとて肯定した。

「これ以上、愚直な叩き上げの連中に任せてはおけません。だからこそ、普段は捜査などに携わらない私が、こうして足を運んだわけです」

まぎれもない「叩き上げの連中」の一人である丹羽が、隣でむっとしたように眉を上げる。

「はあ……」

高遠はかえって恐縮したように言った。

そのとき、

「大変です！ 黒揚羽の部下らしい男が、屋敷に乗り込んで大暴れしております」

ぼっこりと腹のふくらんだ、中年と言うには少し若い警官が飛び込んできた。

「何だつて！ そんな馬鹿な！ あんなに警備の人間を置いていたんだぞ」

工藤が目をむく。

「本当です。とにかく助勢をお願いします」

警官は必死で続ける。

「行つてまいります！」

すわ自分の出番が来たとはかりに、丹羽が工藤に声をかけ、飛び出した。丹羽は剣道、柔道ともに三段という猛者で、その才を買われて今回の警備に駆り出されたのだ。

「すみません。やつの不意を打ちたいので、あまり大声を出したり足音を立てたりなさないで……」

警官があわてて注意すると、

「わ、わかりました」

丹羽は素直に駆け足を早足に変える。

二人が部屋を出るやいなや、

「言わんこっちゃないわ！ これだから警察なんて当てにならないのよ！ 天使の涙が盗まれたらどうしてくれるの！」

登志子が金切り声でまくし立てた。

「申し訳ございません。ですが、必ず向こうで食い止めさせますから……」

自信家の工藤も、額にうつすら脂汗を浮かべている。と、またもドアがかすかにきしみながら開いた。

「今度は何……」

睨みつけるように顔を向けた工藤が絶句する。先程の警官が、ぐったりした丹羽の上半身を、わきの下に腕を入れる形で支えて入ってきた。

工藤は一瞬呆然としていたが、

「あ、あ……」

高遠と登志子が金魚のように口をぱくぱくさせて、意味をなさない声を発しているのに気づいたらしく、双眸に光を取り戻す。しかも、高遠夫妻は気絶した丹羽を見てではなく、明らかにドアから九十度ずれた場所、二人にとっては真正面を向いて驚いている。二人の視線の先を追い、工藤はもう一度絶句することとなった。

柱時計の振り子室の扉が開き、その前に、黒いシャツとズボンに覆面の人物が立っていた。いや、よく見ると黒ではなく紺色だ。その昔、闇にまぎれて活動する忍者は、柿色や紺色の衣装を身にまとっていたというが、それと同じ理由からだろう。

「出たな！」

工藤は腰の拳銃に手をかけた。まるで化け物か怪物でも現れたような言い草だ。そのとたん、例の警官が豹のような俊敏さで飛びかかり、工藤の両腕をつかむ。

「このっ……！」

振り払おうともがく工藤だが、相手は涼しい顔でびくともしない。そこへ覆面の人物が、一まとめにした長い髪を揺らしながら駆け寄ってきた。

「悪いね」

瞳に不敵な微笑をたたえて言うなり、工藤の背後に回り込み、首に腕を回して頸動脈を押す。工藤の体から力が抜けた。床に崩れ落ちるところを、警官——いや、偽警官が支え、ゆっくり横たわらせてやる。

高遠夫妻は抱き合って震えていた。気の強い登志子でさえ、立ち向かおうなどとは思っても寄らないらしい。宝石箱も床に取り落とし、てしまい、「天使の涙」がその絢爛たる輝きをのぞかせている。

覆面の人物——怪盗と、偽警官が悠然と二人に近づいてきた。

「床に座ってくれないか」

怪盗が口を利いた。穏やかな物腰がかえって不気味で、高遠夫妻は蛇に睨まれた蛙さながら、ずり落ちるように床に尻を突く。

「手を後ろに回して……そうそう」

怪盗と偽警官は、夫妻の両手をソファの足につなぎ、両足も縛り上げてしまった。怪盗は、今度はハンカチを使って「天使の涙」を拾い上げる。てのひらにのせてちよつと眺めると、丁寧に包んで腰の革袋に入れた。

「あ、あんた……どうやって逃げるつもりよ」

ようやく、うわずった声ながら登志子が口を開いた。

「時計の中には、警察が来る前から隠れてたのかもしれないけど、今は庭中に警官がいるのよ」

恐怖と動揺のあまり、一時的におかしくなっているのか、登志子の目がぎらぎらした光を帯び始める。

「警官に変装してるそいつはともかく、あんたはただじゃすまないわ！」

だが、怪盗は動じるそぶりもなく、

「ご忠告ありがとう。だが、そんなことは先刻承知。つまり警官の格好をしていればいいわけだね」

偽警官に目くばせする。と、彼はいきなり制服のボタンを外し始めた。上着を脱ぐと、何と丸めた衣服が腹にくくりつけられているのがあらわになる。もちろんそれは警官の制服だ。

「どうも滑稽な姿で……」

紐をほどこしながら、偽警官が照れたように笑う。

「すまないな。だが、背に腹は代えられなくてね。いや、この場合は腹は背に代えられないのか」

「言い得て妙ですね」

偽警官は、今度は照れ隠しではなく、心底愉快そうに口元をほころばせた。外した制服を怪盗に手渡す。怪盗はそれを、今の衣装の上から素早く身につけると、夫妻に背を向けてごそごそやり始めた。どうやら覆面をはぎ取り、変装を施しているらしい。最後に髪を団子状にまとめ、制帽の中に押し込んだ。

「では、少しの間我慢してくれ」

怪盗がわずかに振り向いて言う、偽警官が夫妻の口に手ぬぐい

でさるぐつわをはめる。二人は堂々と玄関に通じるドアから出ていった。

あとに残されたのは、うなり声を上げ鼻息も荒くもがく登志子と、対照的に、安心して虚空を見つめる高遠であつた。

第一章 怪盗と強盗

昭和三十年、夏――。

中野伊織はあくびをしながら、危なっかしい足どりで階段を下りた。陽の当たらない一階の廊下では、ひんやりした湿気が肌にまとわりつき、足の裏もぺたと床に貼りつくようだ。さわやかな朝とは言いがたいが、冷たい水で顔を洗うと、だいぶ気分がすっきりして頭も冴えてきた。

居間に入って、

「おはよう」

声をかけると、ごはんをほおばっていた父、繁は、^{つひ}「おう」とも「うん」ともつかぬ返事をして、母の由紀子は台所から顔を出して「おはよう」と答える。

「もう、なかなか起きないんだから。三回も声かけたのよ」

茶碗と味噌汁のおわんを伊織の前に出しながら、由紀子が言った。「昨日も遅くまで本読んでたんでしよう。夜更かしはやめなさいって、いつも言ってるのに」

「わかつてるんだけどさ……」

朝から小言は聞きたくない。伊織はちょっと口をとがらせた。昨夜はルブランの『奇巖城』を読み返していたら、結局床に入るのが一時近くなってしまったのだ。

納豆にしょうゆをかけてかき混ぜ、ごはんにのせて食べ始める。

だが、父が手にしている新聞に、つい視線が吸い寄せられ、箸の進みがしばし止まった。伊織のほうを向いているのは社会面。北朝鮮の残留者問題、スイスで開催される「世界母親大会」とやらの話題、先日 of 北海道の豪雨の被害、東京都庁の汚職――。

「うら」

由紀子が見とがめて言った。

「よそ見してないで、さっさと食べちゃいなさい」

「はい……」

伊織は声に不満をにじませながらも、言われたとおりにペースを上げる。

「あなたもお行儀の悪いことしないで」

「ん、ああ」

繁も気まずそうに新聞を閉じ、畳に置いたが、

「もしかして、例の黒揚羽が気にかかるのか？」

話を逸らすつもりか、伊織に訊いた。いともたやすく心を見透かされたのと、自分の単純さを指摘されたような気がしたので、伊織は気恥ずかしくなり、

「ん……まあね」

言葉を濁した。

「黒揚羽ねえ。一体何者なのかしら」

問いというよりはつぶやきに近い調子で、由紀子が言う。伊織と繁はそろって首をかしげた。

「まるでちよつとしたスターよね。週刊誌にも出てるし、ご近所でも噂になってるわ」

「ああ。うちの会社でも、そりゃあお偉方はよく思っちゃいないだろうが、若いやつらの中にはファンもいるよ。今まで新聞なんて、スポーツ面とラジオ欄しか見なかったのに、黒揚羽のおかげで社会面にも目を通すようになったやつだとか、被害に遭った家をわざわざ見に行ったやつだとか」

「あら、どこも同じなのね」

「僕は人んちをのぞきに行くほど、野次馬じゃないよ」

伊織はささやかに抗議した。

「まあ、応援したくなる気持ちもわかるさ。少なくとも俺たち庶民にはな」

繁はちよつと小気味よさそうに笑った。

黒揚羽――。それは、近頃世間を騒がせている怪盗の自称であり、通称であった。初めて噂を聞く者であつたら、怪盗なんて、おとぎ

ばなしの妖精や魔法使いと同じような空想の産物、せいぜい少しばかり風変わりな泥棒が祭り上げられているだけさ、とせせら笑うかもしれない。だが黒揚羽は、まさに怪盗の称号にふさわしい特徴をそなえていた。富裕層——特に、私利私欲のためなら手段を選ばないような者ばかりを狙うこと、犯行の前に予告状を送りつけること、人を殺したり傷つけたりはしないこと、などだ。なお、目撃者が一様に語る、「長い髪」「華奢な体つき」といった言葉と、名前の優美なイメージから、その正体は女性だとささやかれている。

黒揚羽が出没するようになってからというもの、身に覚えのある実業家や政治家たちは枕を高くしては眠れず、警察はじだんだ踏んで捜査に奔走した。ジャーナリズムはこぞつて、今日はどここの社長が、借金のかたに手に入れたセザンヌの絵が、今日は元何々財閥総帥秘蔵の、千利休ゆかりの茶碗が、今日は大臣なにがしの夫人自慢の、ダイヤモンドの首飾りが盗まれたなどと、黒揚羽の活躍を書き立てた。本屋ではアルセーヌ・ルパンや怪人二十面相の本を平積みにし、ここぞとばかりに売り出すありさまだ。

探偵小説マニアの伊織は、黒揚羽への思い入れも人一倍強かった。単に大衆がヒーローならぬヒロインを求めて賛美したり、あこぎな金持ちに対して溜飲りゅういんを下げたりする気持ちばかりではない。自分の夢が突然現実になったような、喜びと戸惑いの入りまじった気持ちも抱いていたのだ。

「お、もうこんな時間か。いかんいかん。伊織よりも俺が遅刻しそうだ」

繁はかけ時計に目をやって言い、味噌汁を飲み干して出ていった。伊織も急いで残りの朝食を平らげ、歯磨きと手洗いを済ませると、「行ってきます」

洗濯物を干し始めた由紀子に声をかけ、家を出た。むらのあるねずみ色の雲に覆われた空からは、大粒の雨が落ちてくる。憂鬱な天気だが、空梅雨と騒がれている今夏のこと、むしろ慈雨と思って感謝するべきなのかもしれない。ズボンの裾や鞆を濡らしながら、開

店前の静かな商店街を通り抜け、伊織は早足で駅へ向かった。

いつも仏頂面をしている、小柄な初老の教師が、分厚い封筒を抱えて入ってくると、教室の喧騒はいったん静まった。だが、浮き足立っている生徒たちのこと、さざなみのようなひそひそ声はいつまでも消えない。

「じゃあ、これから期末試験の答案を返すぞ」

声は大きいが、どこか投げやりな口調で教師が言い、封筒から紙の束を取り出す。

「青木」

「はい」

机の上で手を組み、上履きの先でとんとんと神経質に床を叩いていた男子生徒が、さっと席を立つ。

「東^{あずま}」

「はい」

「安藤」

「はい」

順番が進むにつれて、教室は喜びや驚き、安堵や落胆の声に包まれ、空気も緊張したものから興奮したものへと変わっていった。

「中野」

自分の名を呼ばれ、伊織は立ち上がって教壇に向かった。答案を渡された瞬間、たくさんの赤い斜線が目に入る。点数を確認してみると四十八点だ。化学は伊織のもっとも苦手な科目であり、特に今回の試験は自信がなかったので、覚悟はしていたが、それでもまったくショックを受けないわけではない。

ため息をついて席に戻ると、

「どうだった？」

後ろの席の立花明生^{あきお}が、愛嬌のあるどんぐりまなこをくりくりさせて、身乗り出した。

「どうもこうもないさ。顔見てわからないか？」

伊織は大袈裟に眉をひそめてみせた。

「よくわかったよ。何点？」

「……四十八点」

「そうか。まあ、次があるさ」

明生は芝居がかったしぐさで、伊織の肩に手を置く。

「うん。でも、母さんにこってり油をしぼられそうだ」

両親に試験の答案を見せる習慣はないので、点数を訊かれてもごまかすことができるが、通信簿は見せないわけにはいかない。中間試験の点数も平均すれすれといったところだから、成績は推して知るべし。楽しい夏休みの前に待ちかまえる試験を思うと、今から少々憂鬱だ。

「立花こそどうだったの？」

伊織は答案を机の上に伏せ、教科書で重しをしながら訊いた。

「俺？ 俺は思ったよりよかったよ」

明生は余裕たつぷりに笑って胸を張った。こんな態度を取ってもまったくいやみではなく、むしろ微笑ましく感じられるのは、彼の人徳と素直さによるところだろう。

「へえ。もったいぶらないで、はっきり教えるよ」

伊織とは反対に化学の得意な明生がこう言うからには、高得点に違いない。

「うん。九十点ちょうど」

こめかみのあたりを指でかきながら答えた明生に、

「さすが、優秀じゃないか。何点か分けてくれよ」

うらやましく思いながらも、伊織は本心から賛辞を送った。

「あつ」

唐突に明生が、何かに気づいたらしく声を上げた。伊織がはっとして前を向くと、答案を同級生の宮島が手にして見ている。傍らでは、いつも宮島とつるんでいる井上ものぞき込んでいた。

「返せよ」

むっとした伊織が伸ばした手をかわし、

「四十八点、と」

宮島はぼそりと言った。伊織は頬に血が上るのを感じる。

「うわあ、ひでえ。俺だつてもつとましな点だったぜ」

井上が口を挟む。ただの追従^{ついで}ではなく、少なからず本音らしい響きがこもっているのがまた悔しい。

「一年の一学期からこれじゃ、先が思いやられるな」

「おまえ、来年進級できるの？」

気の置けない者同士の軽口ではなく、明らかに悪意の感じられるからかい。伊織がうつむいて黙り込んでいると、

「やつぱり、どこの馬の骨かも知れないやつは、頭もそれなりだな」

宮島の言葉が胸を刺した。思わず顔を上げると、相手が傷つくの期待しているというような、唇をゆがめた酷薄な顔をしている。

「何だつて！」

怒鳴り声とともに、机をバンと叩く音と、椅子がガタンと揺れる音が聞こえた。伊織が驚いて振り向くと、明生が血相を変えて立ち上がり、宮島と井上を睨みつけていた。宮島は気に障る薄ら笑いをやめなかったが、井上はひるんだ表情を見せている。ほかの同級生たちもみな、かたずを呑んでなりゆきを見守っていた。

「ふざけるな！ おまえら、言つていいことと悪いことの区別もつかないのか？ 中野に謝れよ！」

「立花」

伊織はあわてて明生の手首をつかみ、制止の意をこめて見上げた。

「こら、そこ！ 授業中だぞ」

同時に教師の叱責が飛ぶ。

「だけど先生……」

釈明しようとする明生を、

「言い訳はいい。早く座れ」

にべもなくはねつけると、

「ほら、宮島も井上も席に着け。解説を始めるぞ」

教師は教科書で自分のてのひらを二、三度叩いた。明生は唇を噛

み、すごぶる不本意そうに腰を下ろす。宮島は相変わらず冷然と、井上はほっとしたようにそそくさと、それぞれの席に戻った。

「まず問一と問二。これは中間試験の範囲内だし、説明するまでもないな。問一の答えは、単体がイ、ホ、ト、化合物がハとニ、混合物が口とヘ。問二は口、ホ、ヘで、元素記号は順にMg、Zn、Kだ。問三だが、窒素の化学式は……」

教師が解説に集中し始めたころ、

「ほんと、いやなやつだよな」

明生がいまいましそうにつぶやくのが聞こえた。

「大病院の院長の息子だからって、人を見下しやがつてさ」

「落ち着けよ。気持ちは嬉しいけど、あんなやつら、相手にするだけ時間のむだだし、むきになったら向こうの思うつぼだし」

「おまえってやつは、大物なんだか気概がないんだか……。これじや立場が逆じゃないか」

「気概がないとは言ってくれるなあ」

「だってさ、あそこまで言われて黙ってるなんて……。理性的だとか、寛容だとかってのは美德だと思うけど、さすがに見えていて歯がゆくなるよ」

ふくれつつらをする明生を前に、伊織はただ苦笑した。

伊織は自分の氏素性を知らない。伊織の母親——と思われる女性
は、まだ乳飲み子だった伊織を抱いて、空き地で行き倒れになって
いたという。近くを通りかかった中野夫妻が医者と呼んだところ、
赤ん坊は空腹と疲労で衰弱してただけだったが、女性は肺炎から
敗血症を患っていた。そのまま病院に運ばれたものの、数日後には
帰らぬ人となってしまったのである。見舞いのつもりで病院を訪れ、
そのことを知った繁と由紀子は、子宝に恵まれないのを悲しんでい
たこともあり、これも何かの縁と、遺された子供を引き取ることに
したというわけだ。

子供が「伊織」という名前であることは、おくるみに縫いつけら
れていた文字からわかったが、それ以外のことは一切不明であった。

身分証の類は見当たらなかったし、警察も引き取り手の決まっている孤児の身元調査になど、ろくに対応してくれなかったのだ。女性の数少ない持ち物の中で、唯一手がかりになりそうだったのは、漆塗りに紅梅の蒔絵まきえを施した、古めかしい手鏡だったが、これをどう使って母子の身元を調べればよいものか、一介の民間人に過ぎない繁たちにはわからなかった。

あまつさえ血縁にまつわる噂というのは、色恋沙汰の次に人々の興味を惹くものだ。ましてこうも劇的ないきさつがあつては、伊織が繁と由紀子の実子ではないということが、知れ渡らないほうが不思議であつた。伊織自身も、周囲の人々が自分に向ける、同情と好奇の入りまじった眼差しや、ひそひそと交わされる会話の断片や、宮島のような心ない輩やからからときに浴びせられる、あからさまな侮蔑の言葉によって、早くから真実を知っていた。

とはいえ、あの悲惨な戦争と、敗戦後の窮乏と混乱の中、生なさぬ仲の自分をいつも慈しみ育ててくれた両親に、伊織はいくら感謝しても足りないと思つてゐるし、義理や理屈ではない愛情を抱いてゐる。生みの親がどこの誰なのか、気にならないといえば嘘になるが、さりとて切実に知りたいと思つわけでもなかった。

「いけね」

教師がじろつと二人を睨んだので、明生はちよつと舌を出して首をすくめた。伊織もあわてて前を向き、鉛筆を持ち直す。脳裏に残る宮島の言葉を追い払うように、軽く首を振ると、伊織は板書されている化学反応式を書き写し始めた。

いわゆる草木も眠る丑三つ時――。居酒屋でさえも看板を下ろし、町は静まり返つていた。時折、悲しげにも物恐ろしくも聞こえる野良犬の遠吠えだけが響き、月が雲を透かしておぼろに輝いている。

異様な気配に、伊織は眠りから覚めようとしていた。夢うつつに、

がたごとというかすかな物音が聞こえる。はっと目を開けると、四畳半の狭い部屋のこと、見回すまでもなく、物音の主が視界の隅に飛び込んでくる。伊織はがばっと跳ね起きた。心臓が早鐘のように鳴り始める。

物音の主は机回りを漁っていた。月光は弱々しいうえに逆光で、その姿は暗くかげつていたが、父でも母でもない、見知らぬ人間だということくらいはわかる。中肉中背、というにはやや上背のある男だった。

伊織の動きが目に入ったのだろう、男は手を止めてこちらを向いた。伊織の心臓がひととき大きく跳ね上がる。後ろに手を突いた体勢のままあとずさった。口の中が干上がり、額やてのひらから脂汗がにじみ出る。

男は戸惑うことなく、腰から何かを抜いた。暗がりにも目が慣れてきた伊織には、その正体を見て取ることはできたものの、しばし脳が認識を拒む。

(……拳銃!?)

映画や小説、ことに伊織の愛する探偵小説ではおなじみだが、多くの人は、一生涯実物を目にすることはないであろう凶器だ。

男はやや大仰な動作で安全装置を外し、銃口を伊織に向けた。あまりに非現実的な状況に、今度こそ頭の回転が追いつかなくなり、伊織は何も考えられず、感じられなくなってしまった。

「大声を出すなよ。おもちゃじゃないんだからな」

男が低い声で凄みを利かせた。伊織は我に返り、がくがくと首を縦に振る。男は変哲のない作業着を着ていた。目が細いのと頬骨が張っているのが目立つくらいで、特別いかついというわけではないが、心なしか、全身から剣呑さが立ち上っているような気がする。

「おまえ、中野伊織だろう?」

どうして自分の名前を知っているのだろうか? そして、なぜ確認する必要があるのだろうか? 怪訝に思ったのと、認めたら何か危害を加えられるのではないか、という危惧から、伊織は今度はためら

いがちにうなずいた。拳銃などを持っているところからしても、この男はただの物盗りではないのかもしれない。

さらに、次に男が発した質問も、伊織の予想だにしないものだった。

「鏡はどこにある？」

「かが……み？」

伊織は上あごに貼りついた舌を引きはがして、かすれた声で訊き返した。

「そうだ。おまえの母親が持ってたっていう手鏡だ。まさか捨てたり、売ったりはしていないだろう？」

理由はわからないながら、男の意図は呑み込めた。が、生みの母の唯一の形見を、得体の知れぬ男の言うなりに差し出すのが悔しく、伊織はすぐには返事ができない。

「何度も言わせるな。鏡はどこだ？」

男が語気を強め、一步近づいてきた。

「お、押し入れに……」

とつさに口を割ってしまう。

「ふん。おまえが出せ」

男は抑揚のない声で命じた。伊織はふらふらと立ち上がり、銃口を気にしながら男に背を向けた。押し入れのふすまを開け、色あせた風呂敷に包まれた鏡を取り出す。

箱を抱きかかえ、男のほうに向き直ろうとしたときだった。

「待て」

抑えてはいるが凜とした、中性的な声が、息のつまるような緊張と静寂を破った。伊織はもちろん、男も弾かれたように振り返る。

そこには、窓の棧に両足をのせ、膝を折った体勢の人影があった。鼻から下を覆面で隠し、ぴったりしたシャツとズボンを身につけている。一つに結い上げた髪と、マントが風になびいていた。シャツもマントも同じような暗色なので、体の線は見えにくい。それでも控えめな胸のふくらみが見て取れ、少年ではなく女性だということ

がわかった。

「誰だ、貴様」

ちんにゅうしゃ

新たな闖入者に銃口を向けて、男が訊いた。だが、伊織にとってはもはや明らかなことだ。

（この人は……あの……）

「信じられない」という思いと「そうに違いない」という思いが、伊織の心の中で交互にふくらむ。今度は恐怖ではなく、期待で胸が高鳴っていく。男とて、彼女の噂を耳にしていないはずはあるまいが、とっさには思いつかないのだろう。

「黒揚羽……？」

女性が答えるより先に、伊織は思わず口に出していた。女性は伊織のほうを向き、あごをしゃくって、

「私もずいぶん有名になったものだ。名乗る前に正体を言い当てられるなんて」

「黒揚羽だつて？ ああ、今女子供がピーピー騒いでる、きざな女泥棒か？」

黒揚羽から銃口を逸らさぬまま、男は鼻で嗤^{わら}った。

「本物なのか？ 黒揚羽は金持ちしか狙わないし、盗みに入る前には予告状を出すって聞いたが」

「あいにく本物さ。ただ、今回は盗むつもりで来たんじゃないんだ。こみ入った事情があつてね。おまえだって、自分の仕事にどんな意味があるのか、不思議に思っていないはずはないだろう？」

「貴様……なぜそんなことを知っている？」

「私もはなはだ興味があるんだ、その鏡に。だからこそ、こんな夕イミングで現れたんだが」

その答えから、彼女を敵——少なくとも邪魔者だと認識したのだろう、男は黒揚羽に殴りかかった。拳銃を使わなかったのは、銃声が響くのをおそれたからか、女だと思って見くびったからか。黒揚羽は棧から飛び下りると、男の懐に入って、みぞおちにこぶしを打ち込んだ。

「ぐふっ」

男がぐもった呻き声を上げてくずおれる。その体の下敷きにならないよう、黒揚羽はさっと身をかわした。

だが敵もさる者、次の瞬間、男はカツと目を見開いて銃を抜く。とはいえ、幸運にもその動きはまだ鈍重で、手元もふらついていた。黒揚羽がとつさに横跳びに跳ぶ。

家中を揺るがすような強烈な音と衝撃が、伊織の脳天に響いた。音がやんでも鼓膜が震えているような気がする。銃弾は、黒揚羽のマントをかすって壁にめり込んだ。

「ちっ」

男が舌打ちをして、再び照準を合わせようとする。その隙に、黒揚羽は拳銃を蹴り上げた。こんなときなのに、思わず伊織が見とれてしまったくらい、すらりとした脚がまっすぐ、美しく伸びる。鈍く重々しい音とともに、拳銃が畳に落ちた。黒揚羽はそれを拾い上げたが、構えることはせず、腕を下ろしたまま男を見据えた。

「伊織、どうしたの!？」

「今の音何だ!？」

突然、階下から切迫した声が聞こえた。とたんに男は身をひるがえす。先程の苦痛が残っているのだろっ、いくらか前かがみになりながらも、窓から屋根に飛び下りた。

一方、黒揚羽はあとを追うことはせず、視線を伊織に移した。

「悪いが、その鏡、しばらく預からせてもらってもいいか？」

「え……」

思わぬ台詞に、伊織は目を白黒させる。

「調べたいことがあるし、おまえが持っていると、また今日のように狙われるかもしれないからな。大丈夫だ、盗るわけじゃない。それに、近いうちにまた来る」

黒揚羽の声には真摯な響きがにじみ出ている。伊織は自分の直感を信じることにした。恋文でも渡すように、両腕をまっすぐ伸ばして手鏡を差し出す。

自ら頼んだにもかかわらず、黒揚羽は一瞬驚いたような目をしたが、

「ありがとう」

手鏡を受け取ると、心なしか弾んだ声で言った。足音と階段のきしむ音は、すぐそこまで迫ってきている。黒揚羽は身をひるがえすと、窓枠をつかみ、その名のとおりの蝶のように身軽く体を持ち上げた。同時に、

「伊織？ 開けるわよ？」

由紀子の声がして、勢いよくふすまが開く。

「きゃっ！」

「うわっ！」

黒揚羽の後ろ姿を目にした両親が叫んだ。だが親たるものの性で、不審な影の正体より、まずは我が子のことの方が心配らしい。窓に駆け寄るでも、通りを見下ろすでもなく、

「何だ！？ 今の泥棒か？」

「大丈夫？ 怪我はない？」

立ち尽くしている伊織に質問を浴びせた。由紀子などは、すがりつくように伊織の肩をつかんで、今にも泣き出さんばかりに顔をゆがめている。

「うん、僕は大丈夫」

伊織は何度かうなずいてみせて、

「泥棒……というより一人は強盗で、もう一人は」

未だ夢から覚めやらぬような心地で言った。

「黒揚羽だったよ」

第二章 手鏡の秘密（一）（前書き）

第二章、やや長いので二つに分割します。

第二章 手鏡の秘密（一）

繁が公衆電話から――〇番通報すると、数名の警官が駆けつけた。ただの居空きや出来心の強盗ではなく、一人は拳銃を所持していたということ、一人は天下に名だたる黒揚羽だったということで、警官たちも目の色を変えた。尋問された伊織は、二つのことを除いては事実を述べた。黒揚羽の足を引く張るようなことは言いたくなかったが、あまりにもわからないことが多すぎて、何が彼女にとって不利な情報なのかさえ判断できなかったのだ。伏せておいたこと――それはもちろん、黒揚羽が再訪を誓ったことと、望まれるまま彼女に鏡を手渡したことだ。事件の鍵が鏡にあると知った警察は、繁と由紀子に伊織の出生について尋ねたが、二人とも事情を説明し、自分たちもよく知らないと答えるしかなかった。

結局、伊織たちが再び床に就いたのは明け方になってからだ。当日はまだ身辺は静かであったが、翌日には噂が広まってしまったらしい。伊織は登校すれば同級生たちに取り囲まれ、由紀子は表を歩けば、近所の奥さん連中に呼び止められるはめになったのである。

そんな落ち着かない日々が数日続いた。毎晩伊織は、

（黒揚羽はいつ来るのか、本当に来るのか）

と、懷疑混じりの期待をもって眠りに落ちた。

土曜日のことである。昼食にそうめんをすすったあと、伊織はうちわ片手に、足を投げ出してくつろいでいた。開け放した障子の先に降り注ぐ陽光が、別世界のもののようになぶしく目に沁みて、やかましい蝉の声に交じって、どこからか風鈴の澄んだ音が響いてくる。自然とまぶたが下がってくるような、気だるいが満ち足りた昼下がりがだ。繁などは、座布団を枕にもういびきをかいていた。

不意に、トントんと玄関の戸を叩く音がして、

「はい」

皿を洗っていた由紀子が、手を拭き拭き出ていった。

「あのう、失礼ですけど、どちらさまでしょうか？」

見知らぬ人間らしいが、押し売りだろうか。伊織は耳を澄ませたが、相手の声は表に流れてしまいうらしく、聞こえるのは由紀子の声ばかりだ。

「あらまあ。今呼んできますから、ちょっと待っててちょうだいね」その言葉に伊織は身を起こした。由紀子の言葉遣いからして、やってきたのは知り合い——それも、父ではなく自分の友人のようだ。

居間に戻ってきた由紀子は、満面の笑みを浮かべて、

「伊織、あなたにお客さんよ。学校のお友達ですって。とっても可愛い女の子」

「えっ？」

伊織は耳を疑った。当たり障りのない会話を交わすような仲の女生徒なら、クラスに何人かいるものの、家を訪ねてくるほど親しい間柄の子なんて、どう頭をひねっても思い当たらない。ひよっとして、野次馬根性の旺盛な誰かが、先日の事件についてさらに詳しく聞き出すべく、押しかけてきたのだろうか。そう思うといささかうんざりしたが、さすがに上下ともに下着一枚といういでたちで、女の子の前に出るわけにはいかない。あわてて二階に上がって身支度を整えてきた。

玄関に出ると、セーラー服姿の、すらりとした背の高い少女が立っていた。白いラインの三本入った紺色の襟えりに、臙脂色えんじのスカーフ、紺色のひだスカート、たしかに伊織の高校の制服である。

一目見て伊織は息を呑んだ。由紀子の言ったとおり、いや、それ以上の、非の打ちどころのない美少女だ。黒曜石の瞳、白磁の肌、桃の花のような唇、腰まである濡れ羽色の髪。まなじりが切れ上がっているのが、ややきつい印象を与えるが、それも少女の魅力を損なう要因にはなっていない。

おかしいことに、伊織には彼女にまったく見覚えがなかった。こ

れほどの美少女、クラス内にいたり、登下校時や行事で顔を合わせ
ていたりすれば、必ずや印象に残っているだろう。そうでなくても、
男子の間で話題になりそうなものだ。

「待たせてごめん。ええと……君、何組の子？ どこで会ったのか
な？ 言いにくいんだけど、ちよつと思ひ出せなくて」

あまつさえ緊張しているのに、自分だけ相手の顔を忘れていると
あつては、気まずさもひとしおだ。

「会った場所？ おまえの家じゃないか、伊織」

少女はふつと微笑し、からかうように言った。

「君……いや、あなたは！」

二重の意味で伊織は驚愕した。一つはもちろん少女の正体に、も
う一つは、その「正体」に当たる人物がこんなうら若い——いや、
幼いと言つてもいい年恰好だということに、である。

「約束どおり、また来たぞ。泥棒に二言はない……なんてことわざ
はないが」

とにかく、伊織は少女——黒揚羽を家に引き入れた。戸の閉まる
音を聞いて様子を見に来た両親に、

「おじさま、おばさま、突然お邪魔してすみません」

黒揚羽は、良家の令嬢としか思われぬ上品さでおじぎをした。声
音まで、鈴を鳴らすような高いものに変わっている。

「いえいえ、どうぞゆっくりしていつて。すぐにお茶をお出ししま
すから」

由紀子は愛想よく応対し、繁は浅黒い顔を赤らめて、「いやあ、
どうも」などと他愛ない言葉を繰り返す。男はいくつになつても美
人には弱いものだ。だが、伊織は気が気ではなく、背中を押すよう
にして黒揚羽を自分の部屋に連れていつた。

間もなく由紀子が、氷を入れた来客用の緑茶と、三角形に切つた
すいかを運んできた。戻ろうとするところに駆け寄つて、

「あのさ、あの子がいる間はそつとしておいてくれる？ いや、別
にその、やましいことをするつてわけじゃないんだけど……」

伊織は両手を合わせて頼んだ。一応は犯罪者である黒揚羽を警察にも突き出さず、自室に招き入れているのだから、これも一種の「やましいこと」なのかもしれないが、言葉のあやというものだ。

「わかつてるわよ。大丈夫、母さん、伊織を信頼してるから」

由紀子は陽気に伊織の肩を叩いた。あとでどれだけ話の種にされるかと思うと気が重いが、やむを得まい。

由紀子の足音が遠ざかると、伊織は表にも話し声がもれないように、窓を閉めた。

「なかなか気が利くじゃないか」

「ちょこなんと正座していた黒揚羽が言い、

「いただきます」

コップに手を伸ばしてお茶をすすった。伊織も彼女の前に腰を下ろす。訊きたいことは山ほどあったが、どこから切り出してよいやらわからず、

「その制服は……？」

とつさに口をついて出たのはそんな質問だった。

「これか？」

黒揚羽はスカーフをつまみ、ずいとう身を乗り出した。伊織はどきまぎしたが、何のことはない、小声でも聞こえるようにという配慮だろう。

「おまえの学校に転入するという口実で仕立ててもらったんだ。これなら万が一見張りがいても、やつらの目をごまかせるだろう？ さつきのおまえがそうだったように、制服を着て白昼堂々現れれば、よもや私が黒揚羽だとは思わないからね」

「見張りって……この家にですか？」

「ああ」

「もしかして、あのときの男が？」

「あいつ本人だとは言いきれないけど、仲間ではあるだろうな」

さらに質問を浴びせようとした伊織を、

「ちよつと待った」

黒揚羽は手を上げて制した。

「私が順を追って、あの事件の背景を説明する。そのほうが手っ取り早いだろう」

「あ、はい」

自分が先走ってしまったことに気づき、伊織は赤くなってうなずく。

「まず、おまえの出生について話したいんだが、心の準備はできているか？ 本当なら、赤の他人の私が教えることじゃないが、ここを通らなきゃ話が進まないし、いずれもうすぐわかることだし」

どうしてそんなことを黒揚羽が知っているのだろう、という疑問は、この際後回しだ。伊織は一瞬ためらったが、あの日以来、この問題に向き合わなければならぬ時期が来ていることには、うすうす気づいていた。ここで否と言うほど意気地なしではないつもりだし、好奇心にも勝てなかった。それは好奇心というより、自分のアイデンティティーをはっきりさせたいという、人間としての自然な欲求だったかもしれない。

「大丈夫です。ぜひ教えてください」

伊織が意を決した表情で言うと、

「よかった。じゃあ、本題に入ろう」

そう前置きして、黒揚羽はおもむろに膝を崩した。

「おまえの父方の一族は鈴倉家すずくらいといって、南伊豆のほうの名士なんだ。音の鳴る鈴に、倉庫の倉と書く」

伊織は頭の中で漢字を思い浮かべる。

「鈴倉海産って会社を知らないか？ 苗字をカタカナにして、商標に使っているんだが」

「もしかして、缶詰とか乾物とかで有名な？」

「そう、海産物の加工食品の会社だ。あそこを経営してるのが鈴倉家だよ。そして、鈴倉家の跡継ぎで現社長の数馬さんと、鈴倉海産の工場で働いていた秋子さんとの間に生まれたのが、おまえなんだ、伊織」

そう言われてもすぐには実感が湧かず、伊織は何だか他人事たにじのようない気持ちで聞いていた。

「数馬さんは、遊びではなく、秋子さんを本気で愛していたようだ。息子のおまえも生まれたし、正式に妻にするつもりだったらいい。だが、いかにせん身分違いの恋だろう。周囲の……特に数馬さんの父、総一郎の猛反対に遭って破局したんだ。おまけに、数馬さんはほかの女性と結婚させられてしまった。秋子さんはおまえを生んでしばらくして、いたたまれなくなって町を出た」

「それで……」

伊織は一瞬迷った末、

「秋子さんは、東京に流れてきたんですね」

この呼び方を選んだ。由紀子以外の女性を「母さん」や「母」と呼ぶのには、抵抗があったからだ。

「ああ」

「じゃあ、あの鏡は？」

「あれは鈴倉家に代々伝わる……ちょっと言い方が大袈裟だが、家宝みたいなものだよ。鈴倉家の家紋は梅なんだ。実は紅梅のもののほかに、もう一面白梅のものがあって、対になっている。おおかた、将来を誓った証にでも、数馬さんが秋子さんに紅梅のほうを贈ったのだろう」

「どうして秋子さんは、別れるとき鏡を返さなかったんでしょう？」

「さあ……。そのときもまだ数馬さんを愛していたからかもしれないし、自分に憂き目を見せた鈴倉家に、一矢報いてやろうという気持ちがあったからかもしれない。こればかりは私にもわからないさ。家宝の片割れを持っていかれたものだから、総一郎はあわてて追っ手を出したが、ついに秋子さんを見つけることはできなかった」

生みの母の人生を初めて知り、伊織は感慨のため息をつく。

「そしてこの前の強盗は、鈴倉家が……というより、おまえの祖父であり鈴倉海産の会長でもある、総一郎が雇った男だ。ただし理由は教えられず、単に鏡を盗むよう命じられただけ。総一郎はいろいろ

る後ろ暗いところのある男で、ならず者の一人や二人、雇うくらい
わけないのさ」

「そうだったんですか……」

祖父といつても顔も見覚えておらず、まして愛し合っていた数馬
と秋子を引き裂いた男だ。肉親に強盗を差し向けられたというシヨ
ツクは薄かったが、

「だけど、一度はあきらめたものを、どうして今になって、また奪
い返そうとするんですか？」

「それにはまた理由があつてね。今度は、十五年前どころじゃなく
古い話になる」

黒揚羽の瞳が輝いた。夢見る少女の輝きというよりは、獲物を見
つけた狩人のそれだ。

「下田の町は江戸時代初期に発展を遂げた。鈴倉家は、それに伴い
勢力を伸ばした豪商で、一時は伊豆でも一、二を争うほどだったの
さ。ところが元禄のころ、抜け荷のかどで告発され、商売も家もつ
ぶされてしまった。鈴倉一族は、商売敵の讒言さんげんによる濡れ衣だと主
張しているがね」

黒揚羽はひよいと肩をすくめて、

「さて、当時の鈴倉家の主は鋭敏な男で、自分たちに嫌疑がかけら
れていることを察していた。どうあがいても罪を逃れられないと知
った彼は、財産をかき集め、番頭をはじめ本当に信頼している奉公
人たちに隠させた。そして、一对の鏡を幼い息子に託し、妻と番頭
とともに逃がしたんだ。その後主は死罪、一族も罪に問われ、家財
は没収された。鈴倉家が再興したのは、明治になって鈴倉左門さもんが鈴
倉海産を創業してからさ。だが、逃げ延びたはずの妻と番頭も、主
の息子に鏡の秘密を教える間もなく命を落としてしまったらしい。
財産のありかは子孫に伝わらず、手鏡だけが受け継がれた。いわゆ
る埋蔵金となつたわけだね」

「埋蔵金!？」

伊織はすつとんきょうな声を上げた。

「眉唾ものだと思うか？ 正直なところ、つい最近までは私もそう思っていたし、当の鈴倉家の人たちだって同様だっただろうな。有名な徳川幕府、秀吉、結城家ゆうぎのをはじめ、埋蔵金伝説というのは全国各地に残っているが、多くの人々が挑戦しているのにもかかわらず、未だに発見されていないものばかりなんだから。だが鈴倉家の場合、総一郎が、手入れをしようとして鏡を落としてしまったことをきっかけに、話は一変した。鏡の柄えの部分の外れるようになって、その中に空洞があり、紙切れが収められていることがわかったんだ。その紙切れに不可解な文章が記されていたのさ」

今度は伊織は声を上げることもせず、ただ目をみはっていた。

「これは暗号文……それも鏡の由来からして、例の埋蔵金のありかを示したものではないか、と考えた総一郎は色めきたった。あの鏡は、十七世紀末から十八世紀初頭のものだと鑑定されているから、時代も一致している。だが、暗号はどうしても解けなかったし、でなくとも対になっている鏡なのだから、暗号文も二つに分けて隠されていると考えるのが自然だ」

「だから、僕の鏡を盗みに……」

もともと、こういう古風でロマンチックな物語に慣れ親しんでいた伊織だ。まして、話を持ってきたのは、存在自体がロマンチックな黒揚羽と来ている。埋蔵金の有無や暗号文の真偽については未だ半信半疑だったが、理性に反して心が浮き立つのは抑えられなかった。

「そういうことだよ」

「だけど、よく僕の居場所を突き止められましたね」

「うん。おそらく、十五年前からある程度突き止めていたんだと思う。ただ言いにくいことだが、秋子さんが陽の当たる暮らしをしていなかったのと、あんな時代だったから鈴倉海産の経営も苦しく、総一郎にも余裕がなかったのとで、行きづまってしまったんだろう」

黒揚羽が言葉を切ると、二人の間にはしばし沈黙が落ちた。気がつけば、閉めきった部屋はひどく蒸し暑くなっており、ぬぐっても

ぬぐつても汗が噴き出してくる。黒揚羽の額にも玉の汗が浮かんでいた。

黒揚羽は両手で髪を持ち上げると、ぱつと離して風をはらませた。傍らの鞆を引き寄せて、伊織には見慣れた風呂敷包みを取り出す。黒揚羽がほくと、川に紅梅の花が散るさまを、金と朱金で描いた、漆塗りの手鏡が現れた。

「柄の部分を強く引つ張つてごらん」

黒揚羽に促され、伊織は鏡を手につけて、柄をつかんで恐る恐る引つ張った。何度か力をこめてみると、不意に手ごたえが軽くなつて柄が外れる。川の絵柄の輪郭に沿うように外れるため、一見こんな切れ込みがあるうとはわからないのだ。伊織が柄の空洞をのぞき込むと、

「悪いが、暗号文はこつちだ。いちいちその中に出し入れするのは面倒だからね」

黒揚羽は胸元から、楕円形の銀のロケットを取り出し、ふたを開けた。古いものと新しいもの、二枚の紙片が小さく折りたたまれて入っている。

「こつちが鏡に収められていたもの、こつちは読みやすいよう私が書き直したもの」

説明しながら、黒揚羽は丁寧に紙片を開き、畳の上を滑らせるように差し出した。伊織は手に取ってしげしげと眺める。

もおおつじおのならちいにをすみいしいをすまわしこよおこつでつんきとろのかしく

「も、お、お、つ、じ……」

思わず読み上げてしまい、あわてて口をつぐんだ。まさか真つ昼間から外壁に張りついている間抜けな偵察者がいるはずもなし、盗み聞きされる心配はないと思うが、念には念を入れよだ。

試みに逆さに読んでみたり、文字を飛ばして読んでみたりしたが、

さっぱり意味が通じない。伊織はあきらめて紙片を畳の上に戻した。もっとも落ち込む必要はない。もう一方の暗号文も単独では解けないものらしいから、こちらも同様と見てよいだろう。

「それで……あなたは宝探しをするんですね？」

「もちろん。機をうかがって、白梅の鏡の暗号文も手に入れてね。肝心の内容は、私もまだ知らないんだ。何しろ、総一郎の警戒ぶりは相当なものでね。鏡は書斎の金庫に収めておいて、暗号文が出てきたってことも、執事の佐々木って男にしか教えていないのだから」「家族にも、ですか？」

「ああ。数馬さんは人が好すぎるし、自分の妻たる絹枝さんのことは軽んじている。ほかの親族にはいさかいのもとだと思っているのだろう。ただでさえ、円満とはいかない一族なのだから」

「円満とはいかない……？ 家督争いでも起こっているのですか？」

「争いというほどのものでもないがね。総一郎には、数馬さんの下にもう一人息子が……つまりおまえにとつての叔父がいる。この男がなかなか強欲で野心家だね。長男だからという理由で、おとなしい数馬さんが総一郎のあとを継いだことに、不満たらたらなのさ。」

ここで埋蔵金なんぞ出てきたら、一悶着起ひともちやくこるに決まってる」

「はあ……。お金がありすぎるのも楽じゃありませんね」

伊織は訳知り顔でうなずいたが、

「でもそれじゃ、あなたはどうして知っているんですか？ さっきの話だと、はじめから暗号文が眠っていると考えて、鈴倉家を調査していたわけではないのでしょうか？」

そのとたん、今まであまり表情を変えなかった、まして負の感情などまったく見せなかった黒揚羽が、ふっと瞳をかげらせた。埋蔵金の話を疑っているように聞こえて、誇りを傷つけてしまったのか、と伊織は案じたが、すぐに黒揚羽は顔から憂いをぬぐい去って、

「実は、総一郎には私怨があつてね。次の標的にしようと思つて、手下を鈴倉家に送り込んでいたんだ。そうしたら、彼女が暗号文の話を探り出してきた。これはいい、埋蔵金を頂戴してやったら、総

一郎への恨みも晴らせるし、莫大な財宝も手に入るし、一石二鳥だと思っただけさ。いや……一石三鳥かもしれないな。加えて宝探しのスリルも味わえるのだから」

黒揚羽はにつこりして、

「そうそう、埋蔵金が見つかったら、一部はおまえにも分けるよ」
「えっ！」

「莫大な財宝」に魅力を感じないはずはないが、生まれてこの方平凡な暮らしをしてきた伊織には、具体的にイメージできるものではない。まして、一部とはいえ、それが自分のもとに舞い込むなんて考えてもいなかった。

「だって、埋蔵金は本来総一郎のものなんだから、孫たるおまえには何分の一かを相続する権利があるんだよ」

「僕のことは気にしなくても……」

「おいおい、私が仕事をするときの主義は、おまえも知っているだろう？ 金持ちでもなければ非道でもない……標的の条件に当てはまらないおまえから、間接的とはいえ、財産を横取りするわけにはいかないのさ」

まだ困惑した顔をしている伊織を見て、黒揚羽は首をかしげると、
「まあ、いやだというものを無理に押しつけるつもりはないが」
「いえ、いやだとまでは言いませんが……」

伊織はあわててかぶりを振った。もらえとなると戸惑うが、もらえないとなると惜しくなるのだから、金とは厄介なものであり、人間とは因果な生き物である。

「煮えきらないな」

黒揚羽は呆れたように肩をすくめた。

「まあいい。捕らぬ狸の皮算用はこのくらいにしておこう。それより、もう一つおまえに伝えておきたいことがあるんだ」

「何ですか？」

「近いうちに、おまえのもとに鈴倉家から使いが来ると思う」

「え？ 祖父は、鏡があなたの手に渡ったことを知らないんですか」

「？」

「そうじゃない。あのならず者が報告したみたいだからね」

「じゃあどうして？ 祖父にとって、僕はもう用済みなはずでしょう？」

「そんな自虐的な言い方をするものじゃない」

黒揚羽は軽くたしなめたが、

「もつとも、『そんなことはない』と否定はできないのが悲しいところだな。総一郎は、おまえが暗号文の存在を知っている可能性を考えているらしいんだ」

「そこまで気を回しているのですか？ あんなに巧妙に隠されていたら、普通は気づかないと思いますが……」

「でも、総一郎に訪れたような偶然が、おまえにも降りかかるかもしれないからね。あまり当てにはしていないだろうし、総一郎が今躍起になっているのは、むしろ私の行方を捜すことのほうだけれど」

伊織ははつとする。

「そうですよね。大丈夫なのですか？」

「ああ。ここですっぽをつかませるような私じゃないさ」

黒揚羽の瞳には青い炎のような闘志が揺らめいたが、口調は落ち着いており、自信のほどをうかがわせた。

「それから、総一郎の目的は暗号文にしかないが、数馬さんは純粋におまえに会いたがっている」

伊織はぴくりと顔を上下させた。実の父に会えるといっても、喜びより緊張や戸惑いが先に立つ。総一郎の圧力に屈し、自分と秋子を見捨てた数馬を非難するつもりはないが、十五年間他人同然に過ごしてきたのだ。今更どうふるまえばいいのか、何を話せばよいのかわからない。

「使いが来るだけじゃなくて、伊豆の鈴倉邸に呼ばれるかもしれない。そうしたら、私ともきつとまた会える」

「本当ですか？」

むしろ、伊織にはそのことのほうが嬉しかった。

「よかつたら、向こうでも宝探しのお手伝いをさせてください。お金が欲しいっていうよりも、あの……僕、探偵小説が好きで」

机の上にのっている『奇巖城』や、本箱に代用しているみかん箱に目をやる。

「埋蔵金や暗号なんて聞くと、もうわくわくしてしまつて」

何気なく申し出たつもりだったが、黒揚羽は伊織をまじまじと見つめて、

「おまえ、変わっているな。ためらいなく鏡を渡してくれたときも思つたが……」

呆れたような感心したようなため息ののちにつぶやく。

「世間にも私をもてはやしている連中はいるが、それはあくまで表面的で気まぐれな興味、進んで協力してくれる人なんていないと思つていた」

黒揚羽はふと遠い目をして感慨をもらすと、

「異存はないよ。もともとあの鏡はおまえのものなんだし、利己的なことを言わせてもらえば、鈴倉家の一族の中に、味方がいるというのは好都合だ」

「ありがとうございます！」

伊織は顔を輝かせ、軽く頭を下げたが、

「だけど、信頼できないとか、裏切るんじゃないかとか、考えないのですか？」

ふと、知り合つて間もない自分の介入を許した、黒揚羽の無防備さが気にかかった。

「自分から志願しておいて、何を言い出すんだか。それでも人を見る目はあるつもりさ。でなけりややっていけない」

胸を張ってみせてから、黒揚羽は伊織と同様の不安——というより疑問にとらわれたらしい。眉をひそめて、

「そういうおまえこそ、心配じゃないのか？ 怪盗なんてしゃれた肩書きを掲げてはいるが、私は結局泥棒なんだぞ」

「いえ、そんな」

伊織はあわててかぶりを振った。

「僕、あなたに憧れていたんです。泥棒は泥棒でも、あなたみたいに稚気があつて、自分のルールを守って行動している人が、悪人のはずはありません」

一息に告げてから、伊織はぱつと顔を赤らめた。普段の彼なら、若い女性に向かって「憧れていた」などと口にする勇氣は、到底なかっただろう。

「これはまた、ずいぶん高く買ってもらったものだね」

黒揚羽はおかしそうに、またいささか面映ゆそうに唇をほころばせて、

「それじゃあ、おまえが向こうに着いたら連絡するよ。さつきも話したとおり、屋敷には私の手下が潜入しているから、その子に話をつけておく」

「わかりました」

少しの間待つて、黒揚羽からほかに指示がないことを察すると、

「あの……一つ伺つてもいいですか？」

伊織は氣になってしかたがなかったことを尋ねるべく、遠慮がちに切り出した。

「何？」

「どうしてそんな……ちょっと変わった言葉遣いなんですか？」

黒揚羽は目をしばたいて、

「ああ。これは父親代わりの人の言葉遣いを真似ているうち、癖になつてしまつてね。ぶしつけに聞こえたら謝るよ」

「いえ、そういうわけじゃ」

伊織は手を横に振った。実際、いきなり男言葉で「おまえ」呼ばわりされて、面食らいはしたものの、不思議と不快ではなかった。

「ならいい。私に言わせれば、おまえこそどうしていつまでも敬語なんだ？」

「どうしてって……」

初対面も同然であり、敬意を寄せていた相手の前だから、つか

しこまってしまふのだった。

「もつとくだけた口調でいいよ。文字どおりの意味でも、比喻的な意味でも、私はしょっちゅう仮面をかぶっているんだ。肩が凝るのは好きじゃない。まして、おまえと私は首領と手下ってわけじゃない、対等な関係にあるのだから」

「そういうことなら、やめます……じゃなくて、ええと、やめるよ」
伊織がぎこちなく言って目を伏せると、黒揚羽の手が視界に入ってきた。数秒かかって、握手を求められているのだということに気づく。伊織は胸をどきどきさせながら、遠慮がちに白くしなやかな手を握った。

「さあ、そうと決まったら、すいかをいただくとしよう」

黒揚羽の提案で、二人は生ぬるくなつたすいかにかぶりついた。かくして、一人は女学生に扮した怪盗、一人は数奇な運命を背負つた少年、という組み合わせの男女が、向かい合つて黙々とおやつを食べるといふ、奇妙な光景が出現したのである。

繁と由紀子の姿を探すと、二人も居間でお茶を飲んでいるところだった。

「おじさま、おばさま、私そろそろおいとましますわ」

「まあ、もう帰るの？」

由紀子が腰を上げ、歩み寄ってきた。

「はい。このあとピアノのおけいこがありますので」

黒揚羽は真つ赤な嘘をつく。いや、怪盗がピアノを習つてはいけないという法はないが、おそらく嘘なのだろう。

「もっとゆっくりしていつてほしかったのに、残念だわ。でも、ピアノが弾けるなんて素敵ねえ。頑張つてね」

「ありがとうございます。今日はお邪魔しました」

「いえいえ。またいらしてね。頼りない子だけど、これからも伊織と仲良くしてくれると嬉しいわ」

由紀子に名残を惜しまれながら、黒揚羽は中野家をあとにした。

その夜、両親の追及と冷やかに、伊織が辟易^{へきえき}させられたことは言うまでもない。

第二章 手鏡の秘密（二）

黒揚羽の予告に誤りはなかった。

翌日の夕食時、両親はいやに寡黙で、深刻な顔をし、そのくせ妙にそわそわしていた。伊織にはぴんときたが、「どうしたの」と訊いてみるの**も**はばかられたので、気まずい空気をやり過**ご**した。

食卓が片づく**と**、

「伊織、ちょっとここにいてくれ。大事な話があるんだ」

繁が真面目な口調で言った。いつもは真っ先に洗い物を済ませてしまふ由紀子も、今日は食器を流しに運んだだけで戻ってきて、繁の隣に座る。伊織が身構えたのを見て、

「いや、何もお説教とかお小言とかっていうんじゃない」

繁は力なく笑ったが、すぐに表情を硬くした。

「おまえの……出生のことだね」

伊織は黙ってうつむいた。本当なら、もっと驚いてみせたほうが自然だったのかもしれないが、この二人の前でそう神経をとがらせる必要もないだろう。

「夕方、うちにこんな手紙が来たんだ」

繁が、上質そうな白い封筒と便箋を重ねて、伊織の前に差し出した。伊織が手に取ると、案の定、差出人は鈴倉総一郎、住所は静岡県賀茂郡下田町となっている。

「読んでごらん」

繁に促され、伊織は便箋を開いた。

前略 突然お手紙を差し上げるご無礼をお許し下さい。

老生は、株式会社鈴倉海産の会長を務めております、鈴倉総一郎と申す者です。

この度、「黒揚羽」を名乗る女賊にようてくの被害に遭われたとの由、新聞

にて知りました。衷心よりお見舞い申し上げます。

その際、かの女賊の強奪したものが、古色蒼然たる漆塗りの手鏡だったとの由ですが、その特徴から鑑みるに、その手鏡は元々拙宅に所蔵されていた品ではないかと思われます。十五年程前、故あって老生の手元を離れてしまい、以来氣に掛けておりました。

かの手鏡が我が鈴倉家のものであるならば、ご子息伊織君のご生母こそ、それを持ち出した人物ということに相成ります。

本件については更にお話したいことがございますが、書面にてご説明するのは限りがございますし、またそれに相応しい内容とも思われません。宜しければ、お二方のご都合の良い日時を伺った上で、貴宅に代理の者を遣わせたいと思ひますが、如何でしょうか。事が事ですので、伊織君にもぜひご同席の程お願い致します。

取り急ぎ、用件のみにて失礼致します。鶴首してお返事をお待ち申し上げます。

草々

七月八日

鈴倉総一郎

中野繁 様

由紀子 様

伊織が顔を上げると、

「そついうことだ」

繁は重々しくうなずいた。

「十五年間わからなかったものが、今になってねえ。こないだの事件で鏡のことが取り沙汰されてから、もしやという予感はしていたけれど」

傍らで由紀子がしんみりと述懐する。

「それで……父さんと母さんはどうするの？ 鈴倉さんの申し出に応じるの？」

「ああ。先方の意向も考慮しなけりやならんし、折角機会がめぐつてきたのだから、親としておまえの出自を知っておいたほうがいいという気もする。もちろん、そのせいでおまえに対する愛情が変わるなんてことは、絶対ないぞ」

「そうよ、伊織。何があっても、あなたは私たちの息子なんだから」
由紀子が情熱をこめて同意する。

「わかってるよ」

胸が温かくなるのを感じながらも、やはり照れくさく、口調がいくらかそっけなくなってしまう。

「伊織はどうなんだ？ やっぱり自分の出自とか、生みの父さん母さんのことが気になるか？ それとも逆に、わからないままにしておきたいか？」

「僕も……父さん母さんと一緒だよ。自分のことだもの、できればはつきりさせたいよ」

いくばくかの後ろめたさとともに、だがきっぱりと伊織は答える。
「本当に……いいんだな？」

「うん」

今度は繁は由紀子のほうを向いて、

「おまえも？」

「ええ」

どこか淋しげな顔ながら、ためらいなく由紀子は答えた。

「よし。それじゃあ返事を出すでしょう」

吹っきたような、あるいは自分を鼓舞するような、決然とした繁の一言で、その話は締めくくられた。さりとてほかの話題を切り出す者もおらず、立ち去るきっかけもつかめず、三者三様の思いを胸に宿しながら、彼らはしばし無言でその場に留まっていた。

「ごめんください」

約束の時刻より五分ほど早く、朗々たる男の声が居間の緊張を破った。逡巡と焦慮という相反する感情を顔に浮かべたあと、繁と由紀子が玄關に迎えに出る。

案内されてきたのは、五十歳前後と思われる、謹厳実直を絵に描いたような紳士だった。長身かつ痩せ型で、細長い顔に黒縁の丸眼鏡をかけ、コールマンひげを生やしている。

「あなたが伊織様ですか」

「はい、初めまして」

伊織は声も体も強張らせて答えた。

「初めまして。と申しまして、実はあなたがみどりごでいらつしやる時分、一度お目にかかったことがあるのですよ。大きくなられたものですなあ」

紳士は眼鏡を押し上げ、目をしばたいて懐かしげに伊織を見つめた。

「は、はあ……」

伊織が返答に窮していると、

「伊豆からはるばるいらして、お疲れでしょう。どうぞお座りになつてください」

繁が紳士に座布団を勧めた。

「これはどうも」

紳士は静かに正座し、

「改めまして、わたくし鈴倉家執事の佐々木と申します。父の代から鈴倉家にお仕えしておりまして、総一郎様には光栄にも並々ならぬご信頼を寄せていただいております」

執事の佐々木といえば、総一郎が暗号文の存在を明かした唯一の人物だ、と伊織は思い出した。誠実そうな顔をしているからといって油断ならないぞ、と気を引きしめる。

「では早速、書状にてお伝えした件ですが……」

佐々木はよどみなく、伊織と鈴倉家の関係について語った。その内容は黒揚羽の話とおおむね一致していた。相違点といえば、数馬

と由紀子の交際のくだりに、数馬は秋子に軽い気持ちで手をつけたのだが、秋子が熱を上げてしまったため、引きずられるように交際を続けてしまった、というニュアンスが含まれていたところと、当然ながら暗号文のことや、総一郎が強盗を差し向けた張本人だということなど、おくびにも出さなかったところである。繁と由紀子は終始目を丸くして耳を傾けていたが、伊織は初めて聞いたような顔をするのに苦労していた。

「総一郎様、数馬様、総一郎様の奥様絹枝様は、大変あなたに会いたがっていらっしやいます。昔は数馬様と秋子さんの仲を認められなかった総一郎様ですが、それも鈴倉家のためによかれと思つてなされたこと、伊織様を憎んでいらっしやったわけではございません。また、お年を召されて情にもろくなつたところもおありなのでしょう。奇跡のような偶然で孫の居場所がわかつた、これも神様仏様のお導きだろう。一目顔を見たいものだ、こうおっしゃるのでございます」

佐々木はまことしやかに述べた。

「いかがでしょうか？ 折しも伊織様はもうすぐ夏休みでございます。ほんの一週間ばかり、鈴倉家でお預かりさせていただくけにはまいりませんか？」

繁と由紀子は顔を見合わせた。

「ですが、数馬さんとやらには奥さんもお子さんもいらっしやるのでしょうか？ そこに伊織がのこのこ邪魔するというのは……」

「ご心配はごもつともですが、ご安心くださいませ。奥様の志摩子様もご子息の八雲様も、お心優しい方々ですから、こだわりなく歓迎してまいりますよ」

二人の顔から不安は払拭されてはいなかったが、

「だとすれば、私たちがどうこう言える問題じゃありません。せがれさえいいと言つなら……」

「どうする？ 伊織」

由紀子に小声で打診されて、

「僕は構わないけど……」

伊織は答えた。

「よろしいですか。ありがとう存じます。総一郎様も数馬様も、さぞお喜びになることでしょう」

佐々木は両手を握り合わせ、おもむろにこうべを垂れた。

「して、伊織様はいつごろがお暇でしょうか？ いずれにせよ、お盆は避けようと思っておりますが」

「ええと、七月の二十一日から二十八日までの平日は、学校の補習があります、それ以外ならいつでも……」

「かしこまりました」

佐々木は満足そうにうなずいて、

「ようございました。実は、八月の五日、総一郎様が古希をお迎えになりますので、祝賀会を開く手はずになっているのでございます。それにぜひ、伊織様にも参加していただきたいと考えているのですよ」

伊織が気後れしたのを察してか、

「何、祝賀会と申しましたが、総一郎様のご意向を反映して、身内や親しいご友人ばかりを集めた私的なものに致します。堅苦しくお考えになることはございませんよ」

佐々木は如才なく付け加え、てきぱきと日程を決めた。

その後、細かい打ち合わせや交通経路の説明をすると、

「そろそろおいとまいたします」

佐々木は腰を上げた。だが、ワイシャツの襟を正しながら、ふと思いついたように、

「そういえば、あの手鏡ですが、お宅にある間に、落したりぶつかけたりということはございましたか？」

伊織はどきりとした。何気ないふりをして佐々木の顔を見上げると、心なしか、眼鏡の奥の目が鋭く光っているような気がする。

「いいえ、特にありませんが……。どうしてそんなことを？」

何も知らない繁が怪訝そうに尋ねる。

「いえいえ、保存状態が気にかかっただけですよ。お気を悪くされたとしたら、申し訳ございません」

佐々木はあっさり引き下がり、あとは紋切り型のあいさつをして帰っていった。

「驚いたな」

佐々木を見送って居間に戻ると、繁が興奮冷めやらぬ顔でもらした。

「おまえが有名企業の社長さんのご令息だったとはなあ。おまえと……秋子さんを見つけたあの日から、何かいわくがあるのだろうとは思っていたが」

「本当にねえ。事實は小説より奇なり、っていうのはこのことだわ」
由紀子も頬を紅潮させて言う。

「うん。僕もまだ信じられないよ」

これは伊織の正直な感想だった。

「だが、何もかも教えてもらって、かえってすっきりしたな」

「ええ。あんな思わせぶりな手紙じゃ、不安だったけれど」

実際に、両親は憑きものの落ちたような顔で、口元に穏やかな笑みさえ浮かべていた。そこには、生殺しの状態から抜け出した爽快感だけではなく、先方が伊織を引き取るなどと言い出さなかったことへの安堵も含まれていたのだろう。

「まあ、それだけおまえに会いたがっているというなら、悪いようにはしないだろう。楽しんでおいで、というのは不穩当かもしれないが、あまりぴりぴりすることもないさ」

「逆に、鈴倉のお宅と伊豆の土地を気に入って、こっちで暮らすんだなんて言い出したりしてね」

由紀子がいたずらっぽく伊織を横目で見た。「冗談に隠された切実な思いを嗅ぎ取って、

「心配しないで。僕の家はここなんだから」

それどころか、思わぬお土産まで持ってくるかもしれないよ、と伊織は心の中で付け加えた。

「この子ったら」

由紀子は、愛しくてたまらないというふうに、伊織の頭をくしゃくしゃとなでた。決まり悪さに伊織はあわてて身を引く。

「ところで、補習って何の補習？」

由紀子が思い出したように訊いた。しまった、と伊織は額を押さえたが、あとの祭りというものだ。

「実は、化学の試験で……」

四十八点を取ったことをしぶしぶ白状すると、由紀子の目は一転して三角になった。

「まあまあ、取っちゃったもんはしょうがない。次に挽回すればいいじゃないか」

繁がとりなしたが、

「あなたがそうやって甘やかすから……」

由紀子に矛盾^{ほじやき}を向けられて早々に退散してしまい、結局伊織は、小一時間ほどもお説教を食うはめになったのである。

第三章 南伊豆の豪邸（一）

夏真つ盛りのある日、伊織は鈴倉邸へ旅立った。東京から伊東までは東海道本線の準急で二時間半ほど、その先は東海バスで二、三時間なので、下田までは半日もあれば着くのだが、関東を出たことのない伊織には十分長旅に感じられた。まして、腹に一物ある佐々木と二人きりなのだ。車窓の風景さえ満足に楽しめない。

鈴倉邸は、下田港の東北東、Sという海岸沿いにあった。竹垣に囲まれた、風雅な二階建ての日本家屋である。実業家の邸宅といって漠然と想像される、俗っぽさや趣味の悪さはみじんも感じられず、むしろ金をかけていることを誇示しない奥ゆかしさがある。伊織は思わず感嘆してしまった。

瓦葺きの門をくぐると、松や杉や楓の木、笹、美しく刈り込まれた灌木、飛び石などが出迎える。伊織が見たのは表だけだが、裏にはさらに広大な庭園が広がっているようだ。

「このお屋敷は、総一郎様のご尊父で、鈴倉海産の創業者でいらつしやる鈴倉左門様が、大正の中頃お建てになったものなのですよ」
佐々木が誇らしげに解説する。

「只今戻りました」

佐々木が母屋の玄関の戸を引くと、ふくよかな中年の女性が現れ、着物の裾を押さえて、上がりかまちに膝を突いた。

「伊織様でいらつしやいますね。ようこそお出でくださいました。
わたくし家政婦の多喜たきと申します」

多喜は三つ指そろえて深々と頭を下げた。

「いえ、こちらこそ……」

慣れない待遇に伊織が恐縮していると、多喜は丸顔をほころばせて、

「さあ、どうぞこちらへ」

伊織を二階へ案内した。佐々木も伊織のリュックサックを抱えて

ついてくる。

伊織にあてがわれたのは八畳の和室で、もともと客を泊めるための部屋なのだろう、生活臭がなく旅館の一室のような感じがした。座卓、座布団、衣桁いしゅうがあり、床の間には何と書いてあるのかわからない掛け軸と、清楚な風情の生け花が飾られている。

「少々お待ちくださいませ。総一郎様と数馬様にお知らせしてまいります」

佐々木はいったん姿を消したが、五分ほどで戻ってきて、

「すぐにでもお会いになりたいとのことです。荷ほどきがお済みになりましたら、応接間にお通しいたします」

（いよいよだ）

伊織は生唾を飲み込んだ。本当は荷ほどきするほどの荷物もないが、心の準備をするために、貴重品を確認したり衣類を出したりする。

「そろそろよろしいでしょうか？」

頃合を見計らって、佐々木が様子を見に来た。そのあとについて伊織は階段を下りる。期待や緊張や不安が胸に押し寄せ、人の顔のようなイメージがもやもやと脳裏に浮かんだ。

「失礼いたします」

応接間の前で、佐々木が声をかけると、

「ああ。入りたまえ」

しわがれた低い男の声が応じた。佐々木はふすまを開けると、一歩退いて、伊織に先に入るよう手ぶりで示す。

部屋に足を踏み入れると、四角い座卓の三辺を、三人の人物が囲んでいた。口ひげとあごひげをたくわえたいかめしい老翁、垂れぎみの目に二重あごの、小柄で上品な老婦人、彼女と面差しの似通った、気弱そうだが温厚そうな中年の男という顔ぶれだ。

「最奥にいらっしゃるのが総一郎様、伊織様から見て左側にいらっしゃるのが数馬様、右側にいらっしゃるのが絹枝様でございます」

佐々木が紹介したが、それを待つまでもなく、誰が誰だかは一目

瞭然だった。

「伊織……！」

数馬が感に堪えかねたように腰を浮かせた。伊織は言葉を探して立ちすくむ。

「こちら、落ち着け。伊織が困っているじゃないか」

総一郎が苦笑して、手を上下させつつ数馬をいさめた。数馬は我を忘れた自分を恥じるように目を伏せて、座り直す。

「おまえも座りなさい」

伊織も総一郎の勧めに従い、そつと膝を折った。

「では、わたくしはしばし」

佐々木が総一郎に目くばせして、席を外す。

「こんな辺鄙な土地までよく来てくれた、伊織」

真つ先に口を開いたのは総一郎だった。

「いえ、そんな……」

「佐々木から話を聞いたときは、さぞかし驚いただろう」

「……はい」

「今更本当の祖父母だ父だといったところで、素直に歓迎してもらえとは思っていない。だが、ここにいる間に少しでもわだかまりを溶かして、打ちとけてはくれないだろうか？ おまえとおまえのお母さんには、いささか心ない仕打ちをしてしまった。家のため、会社のためにひた走ってきた私だ、当時は気にも留めなかったが、年のせい、近頃昔を振り返って物思いに沈むことが多くてな。せめてもの罪滅ぼしだと思つて、おまえには精いっぱいのもてなしをするつもりだ」

総一郎の言葉は、一見感慨といったわりに満ちており、心にもない嘘だとは信じがたい。伊織は拍子抜けして祖父を見つめていた。

「謝らなければならぬのは私のほうだ、伊織」

数馬がうなだれて口を開いた。

「秋子がおまえを連れて出奔し、生死もわからなくなったとき、私はどんなに自分を責めたことだろう。だから、十五年も経つておま

えの居場所がわかり、あれほど秋子と私との結婚に反対していた父が、おまえに会いたいと言いだしたとき、私は驚きと喜びでいっぱいだった。唯一悔やんでも悔やみきれないのは、秋子がもうこの世の人でなかったということだが……」

数馬は目元を指でぬぐって、

「許してくれなんて言える立場じゃないが、せめて、私がずっとおまえのことを気にかけていたということだけは信じてほしい」

真摯な眼差しと声で訴えられて、

「はい。僕もあなたを恨んでなんかいません。ただ、突然のことでびつくりしてしまつて……」

伊織は気まずいようなくすぐつたいような気持ちで答える。数馬は優しさと淋しさの入りまじった瞳をして、

「ありがとう。おまえはいい子に育つたね。育てのご両親……繁さんと由紀子さんだったね、お二人に感謝しなくては」

それから、伊織は三人——主に総一郎から、学校はどうか、得意な教科は何か、女友達はいるのか、といった他愛ない質問を受けただけであった。長年会社を切り盛りしてきた経験がものを言つてか、総一郎は話し上手かつ聞き上手だ。緊張と警戒からいつにもまして口が重くなっている伊織とも、会話を途切れさせなかった。

「皆様、ご夕食の用意が整いました」

やがて多喜が呼びに来て、伊織たちは座敷へ向かった。

十五畳ばかりの座敷には、ずらりと漆塗りの箱膳が並んでいる。すでに席に着いていた七人の人々が、いつせいに伊織に目を向けた。さすがに無遠慮に見つめる者はいなかったが、その分感情が凝縮されているようで、伊織をたじろがせるには十分だった。

総一郎は伊織の肩に手を置くと、

「この子が伊織だ。前もつて話しておいたとおり、今日から一週間ほどこの家に滞在する。温かく迎えてあげるように」

「よろしく願います」

伊織が頭を下げると、一瞬間があつたものの、全員が会釈を返し

た。

「奥から順に、私の次男、つまりおまえの叔父に当たる兵馬へいば、数馬の息子の八雲、数馬の妻の志摩子、兵馬の妻の昌子まうち、兵馬の長女と次女の、真弓と亜弓だ。亜弓はまだ小学五年だから、遊び相手には物足りんだろうが、八雲と真弓は中学二年だ。年も近いし、気兼ねせず接してほしい」

総一郎が、身ぶりとともに小声で説明する。

兵馬は絹枝より総一郎似だが、総一郎にはない（あるいは年の功で隠しているのかもしれない）冷たさや狡猾さがうかがえる。八雲と志摩子はともに端整な顔立ちをしているが、受ける印象は正反対だ。八雲が人なつこそうで、瞳に抑えきれぬ無邪気な好奇心をのぞかせているのに対し、志摩子は神経質そうで、目を凝らし唇を引き結んでいる。昌子は小太りで、一見ご近所の気のいいおばさんという感じ、真弓は色白でおとなしげな、亜弓は頬の赤いおてんばそうな少女だ。

「手前の彼は書生の安達だ。父親は鈴倉海産の重役で、私の腹心の部下だったが、惜しいことに数年前他界してしまつてな。以来、引き取つて学費の面倒を見ている」

色黒でいかついが朴訥そうな青年が、ぺこりと頭を下げた。

主賓ということで、伊織は総一郎にもっとも近い席をあてがわれた。正面には数馬、隣には絹枝が座る。目の前の膳には、まぐろ、たい、甘えび、いか、そのほか伊織が名を知らぬ白身の魚の刺身、あじのたたき、えびやさつまいも、なすや大葉の天ぷら、たこと海草の酢の物、かにお吸い物などが、所狭しと並べられていた。

「では、我が孫伊織との再会を祝つて」

総一郎がさかずきを掲げ、宴が始まつた。だが、場が盛り上がるはずもない。数馬の態度はぎこちなく、絹枝は無口だ。志摩子は一度も笑わないし、子供たちもはしゃがず、せつかくのごちそうにも食指が動かないようだ。多弁だったのは主たる総一郎と、

「いやあ、あの秋子さんの忘れ形見が見つかるとはなあ。めでたい、

めでたい」

などと放言して、早くから冷酒で顔を赤くしていた兵馬くらのものであった。

気づまりな宴が終わると、伊織は勧められるままに風呂を使った。優に五人は浸かれそうな、旅館顔負けの檜風呂で、多喜曰く温泉を引いてあるのだという。自分の置かれている立場のせいもあるのが、広すぎるのと、照明が暗いのが妙に不安をあおる。浴槽のへりをつかみ、水に浮いて足をばたばたさせてみたが、不意に空しくなつてやめた。

風呂を上がり、漠然とした焦慮と緊張から、手早く体を拭いて着替える。が、脱衣所を出たとたん、伊織はぎよつとして立ちすくんだ。兵馬が待ちかまえていたように渡り廊下に立っていたからだ。

「ええと……次入りますか？」

伊織がいささか間の抜けた質問をすると、兵馬はそれをまったく無視して、

「さつきは父や兄の手前、歓迎するふりをしていたがな。一つ忠告しておく」

憎々しげに伊織を睨みつけた。黒揚羽から兵馬の人柄について聞いてはいたから、「忠告」の内容については想像がついたが、

「……何のことでしょうか？」

空とぼけてみせる。兵馬は鼻で嗤つて、

「純真ぶつてもむださ。遺産だよ、遺産」

「遺産？」

「ああ。おまえとしては、父親や祖父、あるいは我らが一族をよく思つてはいるまい。たかが女工風情と、鈴倉家の跡継ぎが結婚などできるはずがない……秋子が捨てられたのは当然のことだったとしてもな。近親の名乗りを上げられたときだって、反発する気持ちのほうが強かったんじゃないのか？ それをはいはいと招待に応じたのは、祖父に取り入って、あわよくば鈴倉家の財産を、という魂胆なんだろう？　もしかしたら、おまえの育ての親どもが焚きつけた

のかもしれないが」

兵馬はねちねちした口調で決めつける。伊織は、憤るよりもむしろ呆れ果てたような気持ちで、

「僕はそんなことを考えていません。僕の両親だって一緒です」
きっぱりと言いつ返した。

「ふん、どうだか」

兵馬はまったく信じていない顔で、

「とにかく、妙な気を起こすんじゃないぞ。父はおまえごときに懐柔されるほど愚かじゃないし、肝心の鏡がこの場にないのでは、そいつの真贋を見極めることもできない。おまえが兄の息子だという確たる証拠は、何もないんだ。あの昼行灯ひるあんどんの兄が、長男というだけで社長の座に就いているだけでも腹立たしいのに、これ以上理不尽な目を見てたまるものか」

伊織が黙り込んだのを見て、兵馬は小気味よさそうに唇をゆがめると、きびすを返して去っていった。

兵馬の姿が見えなくなると、伊織は小さくため息をついた。と、

「どうかなさいましたの？」

いつの間にか、背後に子猫を思わせる俊敏そうな少女が、小首をかしげて立っていた。年のころは十三、四歳か――。質素な身なりからして女中であろう。肩にかかるくらいの縮れた髪にとび色の目が、ちよつとエキゾチックな印象を与える。

「いや……何でもないんだ」

言葉を濁して歩き出そうとすると、少女は不意に伊織の耳に口を寄せて、

「今夜十二時、あなたの部屋で」
ささやいた。

「え……？　ちょ、ちよつと」

伊織は赤くなって、どういふことが問いただそうとしたが、少女は早足で遠ざかっていく。狐につままれたようにその後ろ姿を見つめているうちに、伊織は思い出した。黒揚羽の、「屋敷には私の手

下が潜入している」という言葉を――。

逸る気持ちを抑えつつ部屋に戻ると、伊織は本を読みつつ十二時を待った。「伊豆じゃないけど、雰囲気は似てるかもしれない」と言って明生が貸してくれた、三島由紀夫の『潮騒』。昨年映画化もされた、いかにも明生が好みそうな、素朴な青春恋愛小説だ。探偵小説を持ってこなかったのは、少しでも黒揚羽を想起させるようなものは、鈴倉一族の目に触れさせないほうが無難だ、と思ったからである。

伊織が鈴倉海産の社長令息だということが、どこからともなくもれると、妙に愛想のよくなった者、羨望の眼差しで遠巻きに見つめる者、宮島や井上のように無視を決め込む者もいたが、明生は以前と何ら変わることなく接してくれる。そんなことを思うと、今朝が発したばかりだというのに、もう東京が恋しくなってきた。

だが、それもつかの間、一日の疲れが一気に押し寄せてきて、まぶたが重くなる。

（少しだけ……）

伊織は誘惑に負け、畳に横になって寝入ってしまった。

「ねえ、ねえったら」

肩を揺すぶられて、伊織はまぶたを押し上げた。目の前というより目の上に、先程の少女の顔がある。動転して飛び起きようとした結果、少女と思いきり額をぶつけてしまった。

「いたた……」

二人はそろって額を押さえ、呻いた。

「何するのよ！ 危ないじゃないの」

さすがに声は抑えていたが、少女はぷりぷりと非難する。

「ごめん。でも、まさか無断で部屋に入ってくるとは思わなかったんだ」

伊織が弁解すると、少女はますます頬をふくらませた。

「それって皮肉？ 言っとくけど、あたし何度も声かけたのよ。眠りこけてて気づかないあなたがいけないんじゃないの」

そう反論されると、伊織にはぐうの音も出なかった。

「お姉さまのファンで、宝探しに協力してくれるっていうから、どんな人かとわくわくして待ってたのに……期待外れだったわ」

少女が肩をすくめて独りごちる。

「そこまで言うことないじゃないか」

さしもの伊織も言い返したが、少女は知らん顔であさつての方向を向いている。

「わかったよ。悪かったってば」

面倒になって折れると、少女はちらつと横目に視線をよこして、
「いいわ。許したげる」

歯切れよく言い、もったいぶるようにゆっくりこちらに向き直った。

「あたし、黒揚羽お姉さまの手下の千里^{ちるり}。ここでは偽名を使ってるから、まりって呼ばれてるけど」

「よろしく、千里。僕は……」

「知ってるわ。中野伊織でしょ」

先回りして言う、千里はにっと白い八重歯を見せた。それこそ猫の目のように、くると気分の変わる子らしい。お天気屋というやつだ。

「そつだよ。で、用件は？」

相手のペースに巻き込まれるまいと、伊織が冷静に応じると、千里はいささか物足りなそうだったが、

「お姉さまから言つて。総一郎の誕生会の日のことよ」

ようやく本題に入ってくれた。伊織は一瞬首をかしげたのち、五日の祝賀会のことを指しているのだと思い当たった。「祝賀会」や「古希のお祝い」と、「誕生会」ではずいぶんニュアンスが違うが、間違っではないのでとりあえずうなずいておく。

「お姉さまはね、それを利用して暗号文を盗むつもりなんですって」「あれ……」

まだ盗んでなかったの、と言いかけて、伊織は口をつぐんだ。い

やみなどではなく、単に事実を述べようとしたただけだが、千里がまた機嫌を損ねそうだったからだ。

「今、ある代議士の娘さんが神経衰弱で、このあたりで療養してるんだけど、その子の名をかたって鈴倉家に接近してるのよ。祝賀会の招待状ももらったって」

「順調なんだね。いつもどおり予告状は出すの？」

「もちろんよ。それがお姉さまの信条だもの」

「でも、そのために祝賀会を中止したりしないだろうか？」

千里は得意げに鼻を鳴らして、

「大丈夫よ。総一郎は鏡に注目が集まるのをいやがっているし、泥棒ごときにびくびくするなんてお家の恥、むしろ黒揚羽を捕らえるチャンスだ、とも思ってるだろうって」

「そうか。ねえ、僕にできることは何かない？」

「ええとね……」

千里は目を宙に泳がせた。本気で考え込んでいるのではない証拠に、口元がゆるんでいる。

「不測の事態が起こっても落ち着いていること。伊織はちょっとそこつ者だから気をつけろ、ですって。さっきあたしにぶつかったことからして、よくわかるわ」

伊織は肩を落とした。

（そこつ者……）

これでは、力を貸しているのか足手まといになっているのかわからない。

「何よ。これくらいで落ち込むなんて、情けないわ。お姉さまにもあたしにも、怪盗の……あたしなんかはただの手下だけど、誇りがあるの。盗む仕事までは、自分たちの手でやりたいのよ。あなたはその先、宝を探す仕事を手伝えればいいじゃないの」

つつけんどんな口調ながら、慰めてくれるつもりらしい。

「ありがとう」

伊織が微笑むと、千里は顔を赤らめて、むっとしたような困った

ような顔で目を逸らした。

「じゃあ、今日のところはこれで帰るわ。何かあったらまた連絡するから」

「うん。気をつけて」

邸内を移動するのに「気をつけて」もないものだが、この場合はまんざらおかしくもなからう。

千里が廊下の奥の闇へと消えていくと、伊織は電灯を消して布団にもぐり込んだ。千里の話を反芻^{はんすう}しているうちに、再び眠りに落ちていったのである。

第三章 南伊豆の豪邸（二）

翌朝の朝食後、伊織は、もう一眠りしようか、それとも外出しようかと迷っていた。昨日の疲れは抜けきっていないので、睡眠をとりたいには違いのないのだが、この重苦しい空気から解放されて気晴らしもしたい。総一郎や佐々木に気を許せないのはもちろん、志摩子は目に見えて伊織をうとんじていたし、数馬とも未だ自然に接することはできない。

と、誰か——その軽やかさからして、おそらく子供があとを追ってくる足音が聞こえた。千里だろうかと思つて振り向くと、意外にもそれは八雲だった。

八雲ははつと立ち止まり、一瞬ためらうそぶりを見せたが、

「あの、伊織さん！」

思いきつたように呼びかける。

「何だい？」

伊織は戸惑いながら訊いた。

「あなたのことはお祖父さんから聞いています。その……僕とは異母兄弟なんだつて」

「異母兄弟」という言葉を、八雲は奥歯にものの挟まったような調子で口にした。

「……そうだね。僕も佐々木さんから聞いたよ」

伊織は当たり障りのない答えを返した。さすがに、八雲が総一郎の命を受けて、自分に探りを入れようとしていると思つたわけではないが、相手の真意を測りかねたのは確かだ。

それに、八雲がどこまで事情を知っているかもわからない。自分の父親が母親と結婚する前に、よその女性との間に子供を作っていたのだ、それだけでもいい気持ちはしなかっただろう。多くを語ればさらに傷つけることになるかもしれないし、要らぬもめごとを呼ぶかもしれない。

「はい。だから……母さんはあなたを好きになれないみたいで。だけど、僕は」

八雲は澄んだ瞳で伊織を見つめて、

「あなたと仲良くしたいと思っています。昔何があったにせよ、あなたは悪くないだし、母親は違っても兄弟なんだし」

伊織は意表を突かれて八雲を眺めていた。志摩子と八雲が、内面は似ても似つかぬ母子だということは、初対面の印象で察せられた。とはいえ、志摩子がああも露骨に伊織に悪意を向けている以上、息子の八雲もどこかで影響を受けているのではないかと勘ぐっていたのだ。だが、八雲は母の意に反してでも、自分と親交を深めようとしてくれているらしい。その素朴な気持ちが、ここに来てからかたくなになりがちな伊織の心に響いた。それに、一人っ子として育てられてきた伊織には、兄弟という存在に憧れるところもある。

「僕も、そう思ってるよ」

伊織は穏やかに言った。

「だけどいいの？ 僕としゃべってるところ、志摩子さんに見つかったら叱られるんじゃないか？」

「そうかもしれないが……いいんです。それは母が間違っていると思いますから」

少年らしい、凜とした口調で八雲は言った。自分が原因で八雲と志摩子に対立することには、伊織は心苦しさも覚える。まして、鈴倉家にとつては敵である黒揚羽と内通し、半ば宝探し目当てでここにもぐり込んでいる身だ。何ら後ろ暗いところはないと胸を張るわけにもいかない。だが、せつかく八雲が自分の意志を貫こうとしているのに、水を差すようなことは言いたくなかった。

「わかった。よろしく、八雲……でいいかい？」

「もちろん！ こちらこそよろしく、兄さん」

八雲ははしゃいで、

「ところで、今日はこれからどうするの？」

「実は僕も悩んでたんだ。ちよつと眠いんだけど、せつかく伊豆に

来たんだから、観光もしたくてね」

「眠い？」

八雲の眼差しが、心配事が問題でもあって眠れなかったのか、と
気遣うふうなので、

「いや、僕、枕が変わると眠れないたちなんだよ」

伊織はごまかした。

「そうなんだ、大変だね。やっぱり悪かったかな、一週間も泊まっ
てもらうなんて」

「君が気にすることじゃないよ。このくらい大丈夫さ。普段だって、
よく夜更かしして寝不足になっちゃうんだから」

伊織が笑うと、ようやく八雲の表情は晴れた。

「じゃあ、海に行かない？ 兄さんは泳げる？」

「まあ、人並みにはね」

「なら問題ないや。ちよつと待つてて」

八雲は小走りに駆けていって、間もなく麦わらのかごと日傘を抱
えて戻ってきた。

「お多喜さんにも声かけてきたから」

表へ出ると、伊織は屋敷の裏手へ導かれた。緑したたる木々の向
こうには、人気ひといけのない海が広がっている。坂を下りながら、

「ここはうちの土地なんだ。夏になると毎日のように遊びに来るん
だよ。姫が浜って呼ばれてるんだ」

八雲は教えてくれる。

「すごいなあ。こんなきれいな浜辺が貸しきりだなんて」

伊織は目をみはった。江ノ島の海水浴場には何度か行ったことが
あるが、海ではなく人の中を泳いだ思い出しかない。

「でしょう？」

八雲は嬉しそうに笑いかけた。その笑顔を見て、伊織は、先程八
雲に好感を抱いたもう一つの理由に気づいた。快活で純真で、自慢
を自慢と思わせない素直さ、彼は明生に似ているのだ。

八雲は、砂浜の中央に構える岩の前へ、伊織を連れていった。か

「ごから海水着を二着取り出して、

「僕のもいい？　ちょうど、大きすぎて合わないやつがあったから」

「構わないよ」

伊織が快く受け取ると、八雲は待ちかねていたようにシャツを脱いだ。そのとたん、伊織ははっとして八雲の脇腹に目を据えてしまった。そこには十センチメートル以上にも渡るであろう、かぎ裂き状の赤黒い傷跡があったのだ。

「あ……これ？」

伊織の視線に気づいたらしく、八雲は傷跡を指で示した。

「去年の冬、交通事故に遭ってね。ガラスの破片が刺さっちゃったんだ」

恐ろしい体験だっただろうに、転んで膝をすりむいちゃったんだ、というのと同じような、照れくさそうではあるが屈託のない口調である。伊織はこの二つ年下の異母弟の強さを知った。

「……ごめん」

「いやだな、兄さん。もうすっかり治ったし、僕全然気にしてないし、そんな深刻な顔しないでよ」

八雲は困ったように、両手を顔の前で左右に振った。

「うん。もちろん僕だって気にやしないさ」

伊織が力強く言くと、八雲は笑顔に戻った。

着替えを終え、二人は波打ち際へ駆け寄った。藍色に浅葱色あやぎやオリブ色の混じった、宝石のような海――。波が盛り上がっては白く碎けて、砂浜をなめてならしていく。普通の砂浜は白というより灰色をしているものだが、ここの砂浜は、南国の絵はがきにでもありそうなまばゆい白さだった。

都会育ちで海に慣れない伊織は、幼い子供の海水浴のように、泳ぐというよりは浮いていた。海は穏やかだったが、それでも波と戯れているというよりは、波に遊ばれている感じた。八雲は沖まで泳ぎに行ったりもしていたが、伊織には注意を払ってくれているよう

だった。

太陽が高く昇り、岩場を隔てた海水浴場が人でひしめき合っているところ、

「そろそろ帰ろうか。おなかも空いたし、そろそろごはんの時間だよ」

八雲の言葉をきっかけに、二人は海から上がり、岩陰に戻った。

「体はどこで洗ってるの？」

伊織が体を拭きながら訊くと、

「うちに帰ってからだよ。私有地だから、当然海の家なんかないし。裏口から入れば、途中で知らない人に会うこともないよ」

あっけらかんと答えて、実際八雲はそのままの姿で歩きだそうとする。鈴倉家を「他人の家」と認識している伊織には、さすがにそれは気が引けたので、

「ちよっと待って」

あわてて海水着の上から服を着た。

鈴倉邸に戻った二人は、浴場で水を浴びて座敷へ向かった。同時に入ってきた彼らを見て、誰もが意外そうな顔をする。そのあと、数馬の目には喜色が、志摩子の目には不快の色が浮かぶ。伊織はたじろいだが、八雲は顔をちよっとこちらに向けて、半ばすまなそうに、半ば安心させるようにうなずいた。

鈴倉家の昼食は、焼き魚やらなすの揚げびたしやら、一汁三菜そろった立派なものだった。夏の昼食は、おおかた麺類かお茶漬けかおにぎりという中野家とは大違いだ。体を動かしたためだろう、気分が落ち着かないのは相変わらずだが、食欲はあった。

「一緒に遊んで……」

数馬は、伊織と八雲どちらにともなく言いかけたが、

「ああ、姫が浜に泳ぎに行ってたのか？」

二人の髪が濡れているのに気づいたらしい。

「うん、兄さんに浜を教えてあげたの」

「兄さん」という呼び名に、数馬はちよっと目をみはった。

午後は八雲と別れ、伊織はひとり部屋に戻った。昼寝をしようと枕を取り出したとき、

「伊織」

廊下から数馬の声が聞こえた。伊織は枕を押し入れに戻し、ふすまを開ける。

「ああ、いや……特に用というわけではないのだが」

数馬は気まずそうに頭をかいた。とにかく伊織は彼を部屋に招き入れ、座卓を挟んで向かい合った。

「どうだい？ 下田は」

数馬が漠然とした質問をする。

「景色も空気もきれいでいいですね。魚もおいしいし……」

「それが売りだからね。そうだ、早速八雲と仲良くなったみたいだね」

「はい。八雲から声をかけてくれたんです」

「ほう。父親の私が言うのも何だが、素直ないい子だろう？」

「そうですね。クラスでいちばん仲の良い友達に似ています」

数馬は満足げにうなずいたが、

「あのまま育ってほしいものだが……」

ふと、その表情がうつすらかげりを帯びる。未来の社長として鈴倉海産を率いるには、そうもいかないということか。

「繁さんと由紀子さんは、どんな方なんだい？」

「ええと……。母は口うるさいところもありますが、明るくてしっかり者です。父は大らかで……それこそ僕が言うのも何ですが、ちよつと不器用で純朴な人です」

「そうか」

数馬は笑ったが、ふと口調を改めて、

「……秋子のことは、何も覚えていないんだよな」

「はい。亡くなったあの、僕が一歳のときですから」

「特に用というわけではない」と言っただけだが、数馬はおそらくこの話をしたかったのだろう。

「秋……いえ、母さんって、どんな人だったんですか？」

伊織が尋ねると、数馬は懐かしげに目を細めて、

「秋子は、とにかくおとなしくて女らしい人だったな。顔立ちはおまえと似ていたよ」

「どうして知り合ったんですか？ 確か、母さんは鈴倉海産の工場で働いていたと聞きましたが……」

「そうだよ。工場の視察に行つて、叱られていたのを止めに入つたのが馴れ初めだった。秋子は体があまり丈夫じゃなくてね。たびたび貧血を起こすことがあったよう……。伊織はそんなことはないかい？」

「はい。僕、体は健康です」

「よかった。それがいちばんだよ」

それきり会話が途切れ、

「突然悪かつたね。そろそろ退散するでしょう」

数馬が腰を上げる。伊織は物足りないようなほつとしたような気分で見送つた。

今更昼寝をする気にもなれず、伊織は『潮騒』のページを開いた。それほど長い小説ではないので、数時間で読み終わつてしまい、手洗いに立つ。

と、角を曲がつたところで佐々木とぶつかってしまった。今日はいろいろなことが起こる日である。総一郎に届けに行くところだったのだから、佐々木の手から封書がばらと落ちる。伊織もぼんやりしていたが、佐々木も冷静沈着な彼に似合わず焦っていたようだ。

「すみません」

伊織はとつさに腰をかがめ、封書に手を伸ばそうとした。

「いえいえ、わたくしが拾います。申し訳ございませんでした」

佐々木が素早くかがみ込んで、封書をかき集める。だが、伊織の目はすでに、黒い揚羽蝶の紋章が描かれた洋封筒をとらえていた。

「あ……」

声をもらしてしまい、一瞬まじいと思ったが、よく考えれば、黒揚羽の予告状がどんなものかはニュースで報道されているのだ。実物を目にして驚いたからといって、黒揚羽と関係があるという証拠にはならない。

だが、知らんぷりを通すのも不自然だ。伊織はあえて動揺を隠さず、目を丸くしたまま佐々木の顔をうかがった。

「どうかなさいましたか？」

封書を回収し終えた佐々木が、顔を上げて尋ねる。

「いえ、その……」

伊織は口ごもってみせた。

「黒い揚羽蝶の封筒ですか」

単刀直入に言い当てられ、今度は本当に、伊織は言葉につまる。

「紅梅の鏡を奪ったのですから、あの女が対になる白梅の鏡も狙っているのは当然です」

佐々木は淡々と語った。いたずらだとかまかすこともできただろうが、あえてそうしなかったのは、偽物にしては紋章に手が込んでいたからか。

「警察を呼んだほうがいいとおっしゃるかもしれませんが、たかが女泥棒の手紙ごときで騒ぎ立てることを、総一郎様はよしとされないでしょう。また、かえってあの女につけ入る隙を与えるかもしれませんし、世間の好奇の目にさらされるのも不本意です。どうぞ、このことは内密にお願いいたします」

佐々木の言葉は嘘ではあるまいが、「内密に」したい最大の理由は、なぜ黒揚羽がそこまで鏡に執着するのか、詮索されたくないためだろう。

「わかりました」

納得したふりをして、伊織はおとなしく引き下がった。

その夜、夕食の片づけをしている千里と行き合つと、彼女は得意げにウインクしてみせた。夕方の小事件のおかげで、伊織にはその意味がわかった。うなずくと、千里は何事もなかったかのように澄

まして去っていった。

第四章 祝賀会の惨劇（前書き）

すみません、更新忘れていました……。

第四章 祝賀会の惨劇

数日間、伊織は八雲と泳いだり、S海岸や下田の名所をめぐるりして過ごした。下田港では漁船を眺め、道路を這っているかにを踏みそうになつて飛びのいた。ねすがたやま寝姿山では、汗だくになつた体を風にさらしながら、伊豆七島から天城連山までを見渡した。伊豆最古と言われる白浜神社では、幹がうねうねと波打っている、前衛芸術めいたご神木の柏楨ひやくしんに目をみはつた。

そして、八月五日――。多喜や女中たちは、朝から準備に大わらわであつた。千里が柱や床を磨いたり、料理や皿を運んだりしている姿を、伊織は何度も目にした。せわしなく立ち働いている人々のそばで、のんびりしているのも心苦しいし、労働していたほうが気がまぎれてよかつたのだが、手伝いを申し出ても断られるに決まっている。下手に動いて怪しまれても困るし、邪魔にならないようにという口実を作つて、八雲と夏休みの宿題をしていた。勉強を教えたり、写生に付き合つたり、二人でなら憂鬱なはずの宿題も楽しい。おやつには、女中の一人が水ようかんを運んできてくれた。

夕方、邸内が招待客でにぎわつてくると、

「ねえ、ちよつと玄関の様子を見に行かない？」

八雲が誘つた。黒揚羽がいつ来るのか気になっていた伊織は、二つ返事で承諾する。

紋付き袴を身につけた、総一郎と同年代の老人から、両親に挟まれた、亜弓くらいの年頃の少女まで、客層は幅広い。一人一人、あるいは一家族ごとに、佐々木が招待状を確認している。

丸刈りで詰め襟服の少年が訪れると、八雲は楽しげに話しかけた。

「一段と黒くなつたねえ」

「そりゃ、毎日練習してるからな。おまえも焼けたじゃないか」

「僕は毎日泳いでるから」

他愛ない会話を交わす二人の傍らで、伊織は招待客の流れを目で

追っていた。と、とうとう目当ての人物に出くわす。彼女は装飾の少ない、清楚な白いワンピースに身を包み、華奢な銀縁眼鏡をかけ、髪の一部を空色のリボンでまとめていた。綿でも口に含んでいるのか、あのときより頬がふつくらとし、眼鏡のせい目も小さく見える。化粧で演出しているのだろう、顔色も心持ち蒼い。勝気な印象はどこにもなく、代わりにいかにも神経衰弱の少女らしい、弱々しくはかなげな風情があった。注意を払っていなければ、黒揚羽だとはわからなかったかもしれない。

戸の向こうには、仏像を思わせる柔和な顔つきの、三十代後半と思しき男が控えていた。黒揚羽が振り向くと、

「それではお帰りの際に、また」

男は一步退いておじぎした。代議士令嬢の運転手か世話係という設定だろうが、実際は黒揚羽の手下なのだろう。

黒揚羽は丁重に招待状を差し出し、

「あまみや雨宮薫と申します。本日は、お招きくださりありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそ、ようこそおいでくださいました」

佐々木はうやうやしく頭を下げ、あっさりと彼女を通す。

問題といえば、庭で遊んで戻ってこない子供たちがいたくらいで、祝賀会は定刻に開会した。

「このたびは、父、鈴倉総一郎の古希を祝って、かくも多数の方々にお集まりいただきまして、厚くお礼申し上げます……」

数馬がスピーチをする。

二間分の座敷を開け放した会場。いつもは一人一人に膳があてがわれるが、堅苦しくないようにという配慮だろう。今日は座卓で、大皿に盛った料理を取り分けるという形式だ。伊織の歓迎会と同じ、刺身の盛り合わせや天ぷらといった定番のほかに、舟盛りの伊勢えびや尾頭付きおかしらのたいのお造り、丸ゆでのたらばがに、焼いたたて、さざえ、あわびなど、さらに豪勢な、慶事にふさわしい料理が並んでいる。

八雲の友人たちに紹介され、当たり障りのない程度に会話に加わりながら、伊織はそれとなく黒揚羽を観察していた。黒揚羽は真弓と歓談しており、時折亜弓もませた表情で口を挟んでいる。

「どうしたの？」

少し気を取られすぎたのか、八雲に不思議そうな顔をされてしまった。

「えーと……あの女の子、真弓さんの友達？」

伊織は単刀直入に訊いてみた。

「うん。どうして？」

八雲は無邪気に問い返す。

「いや、ちよつと……」

決まり悪そうに言葉を濁すと、八雲は伊織の思惑どおりに解釈してくれたらしい。それでも、この年頃の少年らしくもなく、冷やかもしめずただにこにこしているのが八雲らしかった。

「可愛い人だもんね。何でも、代議士の娘さんで、ちよつとした病気でこのあたりで養生してるんだって。慣れない土地で道に迷ったところに、真弓が通りかかって道案内してあげたらしいよ。馬が合うみたいで、最近よく一緒に出かけてるんだ」

八雲の説明に、伊織はふんふんとうなずいてみせた。

宴もたけなわというころ、総一郎の様子に異変が起こり始めた。

こくりこくりと船をこぎ、数馬や佐々木が呼びかけても、一瞬目を開けるだけで、すぐにまぶたを下ろしてしまう。

「変だな。お祖父さんお酒に強い人だし、いつもは絶対に飲み過ぎたりしないのに」

八雲が心配そうに首をかしげる。伊織はもしかと思って黒揚羽に目をやったが、その想像が当たっていればなおのこと、彼女が人目につくようなことをしているはずがない。ほかの人々と同じく、不安と戸惑いの視線をちらちらと総一郎に向けている。

不意に、総一郎はふらりと立ち上がろうとしたが、力尽きてくずおれてしまった。数馬と絹枝がにじり寄り、佐々木が駆け寄る。

座敷は水を打ったように静まり返り、一同はかたずを呑んで総一郎の様子を見守った。だが、主人の呼吸や脈を確かめていた佐々木が、

「おやすみになっていらっしやるだけです。お話に興じられるあまり、珍しくお酒を過ごされたのでしょうか」

と診断したので、誰もがほっと胸をなで下ろした。

「どこか静かなお部屋へお運びしましょう」

数馬が上半身を、佐々木が両足を支えて、総一郎を運び出していた。

数馬は間もなく戻ってきたが、佐々木は総一郎のそばで介抱しているとのことだった。酔いつぶれただけと聞いてはいても、主役を失った宴会は盛り下がらざるを得ない。八雲も何でもないようにふるまってはいたが、空元気なのは明らかで、時折気遣わしげに障子に目を走らせている。

そんな中、黒揚羽はうつむきがちになり、伊織が見るかぎりほとんど口を開かなくなった。真弓が心配そうに声をかけると、一瞬ためらいを見せたあと、口元を押さえて耳打ちする。真弓はさらに顔を曇らせ、ささやき返した。と、二人そろって席を立ち、兵馬の席へ赴く。真弓と兵馬、それから数馬が二言三言話し合った。そのまゝ二人は座敷を出ていき、やがて真弓だけが戻ってきた。おそらく黒揚羽は、「気分が悪いから少し休ませてくれ」とでも頼んだのだろう。

やはり黒揚羽が総一郎に一服盛り、その隙に暗号文を盗もうと計画しているのか――。だが、佐々木はどうするのだろうか？ 薬の効くのが遅かっただけで、彼も今頃、総一郎と枕を並べて眠りこけているのだろうか。

そろそろお開きというころになって、数馬も兵馬に何やら声をかけ、さりげなく座敷を出ていった。黒揚羽のことで頭がいっぱいで、伊織は大して気に留めずにいたが、十分、二十分と時が過ぎるとさすがに胸が騒ぎ始めた。ほかの人々も同様らしく、あからさまに騒

いだりはしないものの、いぶかしげな空気が流れ始める。

放つてはおけないと判断したらしく、兵馬が立ち上がった。それを見て、座はひとまず落ち着きを取り戻す。

だが、人々の期待に反して、兵馬はひとりで戻ってきた。安達を呼んで何事が耳打ちしている。

「僕、ちよつと行ってくる」

八雲は二人に近づき、話しかけた。兵馬は二言三言答えただけのようなだったが、八雲が引かないのを見て、しかたなさそうに言葉を交わす。

「何だつて？」

戻ってきた八雲に、伊織が声をひそめて尋ねると、

「うん。父さん、どこにもいないんだって。お祖父さんの様子を見に行くって言つてたらしいんだけど……」

「佐々木さんは何て？ 総……いや、お祖父さんに付き添ってるんだよね？」

「うん。おじさんも訊いてみたらしいけど、ちよつと顔を出したただけだつて言つてた……。多喜さんも、五分くらい前に寝室に行つてみたらしいんだけど、やっぱりいなかったって」

気がつけば、兵馬と安達の姿はなかった。座敷中の人々が、再び不安を顔ににじませている。

伊織たちが気が気でなく待っていると、あわただしい足音が近づいてきた。縁側に通じるほうの障子が、礼儀も忘れたように勢いよく開く。見れば、兵馬が顔を引きつらせ、肩で息をして立っていた。 「何があつたの、おじさん！」

八雲が悲痛な声で、ほとんど叫ぶように問う。

「みなさん、落ち着いて聞いてください」

兵馬は、彼自身取り乱すのをこらえているような、押し殺した声で切り出した。

「実は……実は、兄が庭で……」

兵馬は言葉を濁したが、その先はたやすく想像できた。誰もが呆

然と目をしばたたく。

「しかも、はなはだ言いにくいのですが、どうやら殺されているようです……」

人々のショックが倍増したのがわかる。非現実が現実となることに、そろそろ慣れつつあった伊織にも、殺人となると重みが違う。まして、被害者は仮にも伊織の父親なのだ。

「そんな……」

八雲が魂の抜けたようにつぶやいた。傍らの志摩子は息を呑み、手で口元を覆っている。

「今、佐々木が警察に連絡しています。遺体のそばには安達がついている。それから、空き部屋で休んでいるという薫さんの安否を確かめに行ったところ、彼女も姿を消していました」

薫の名を聞き、真弓がはっと息を呑む。

「嘘！　ねえ、こんなの嘘でしょう？」

突然、八雲が立ち上がって兵馬に駆け寄った。日頃の彼に似合わない乱暴さで、兵馬を押しつけるように縁側へ出ようとしたが、腕をつかまれて阻まれてしまう。

「落ち着くんだ、八雲！　警察が来るまで現場をいじっちゃいけない」

兵馬は八雲の肩をつかんで言い聞かせた。八雲は糸の切れた操り人形のように、がくんと膝を折る。兵馬が抱きかかえ、ゆっくりと座らせた。立ち上がりかけた伊織だが、

「八雲……！」

志摩子が声を上げて先に駆け寄ってしまったので、気をもみながらもそろそろと腰を下ろした。

一同の顔は夜目にもわかるほど蒼ざめていった。もはや騒ぎ立てる余裕さえもないらしく、凍りついたように固まっているか、歯を鳴らして震えているかのどちらかだ。悲しみおびえる子供たちの鳴咽だけが、いやに大きく響く。八雲は涙も出ないらしく、死んだような目を虚空に据えていた。

やがて警察が到着した。数名は現場に向かい、残りの数名は事情聴取を始める。伊織にとつては人生二度目の、だがたった一月前に味わったばかりの経験だ。

警官と入れ替わりに安達が戻ってくると、尋問が始まった。座敷に残っている人々は一緒に、数馬の部屋で総一郎に付き添っている佐々木はそのあとで、給仕に飛び回っていた使用人たちは個別に、ということになる。総一郎は前後不覚に寝入っているので、目覚めるのを待つことになった。

「わたくし、下田警察署長の菅原と申します。このたびはとんだことで……。心からお悔やみ申し上げます。ああ、こちらは部下の新田^{つた}でございます」

頭のはげかけた小太りの警官が、汗を拭き拭き名乗った。傍らの、二枚目だが目つきの悪い青年刑事が、
「新田です」

無愛想に頭を下げる。

この場にいる鈴倉一族の中で、もっとも立場が上である兵馬と、発見者だという安達が、代表でいきさつを語った。菅原はしきりにあいづちを打ちながら耳を傾け、新田はただ手帳に鉛筆を走らせる。
「なるほど。今のお話でよろしいですか？」

菅原が座敷を見回すと、まだぼんやりしている八雲や何人かの子供たちを除いて、一同こくこくとうなずいた。

「わかりました。では、私は残りの方々と、使用人たちに話を聞けます」

言い残して、菅原は廊下へ出ていった。新田は見張りよろしく正座して、社交辞令の一つも口にしない。

人々の顔に、恐怖や悲嘆よりも疲労の色が濃くなったころ、菅原が興奮を隠さず踏み込んできた。

「みなさん、大変なことがわかりました」

菅原はえらの張った大きな顔を、酒に酔ったように赤くして、
「佐々木さんがおっしゃるには、数日前、総一郎さんのもとに黒揚

羽の予告状が届いたそうです。祝賀会の日、家宝の鏡に隠された暗号文を頂戴すると……。世間の好奇の目にさらされるのを嫌って、総一郎さんが口止めしていらっしやったらしい」

「黒揚羽？ 暗号文？」

憔悴した人々の間にも、さすがに動揺が走った。

「ええ。鈴倉家に、家宝の手鏡があるという話は、みなさんご存じでしょうか？ この鏡に、暗号文を記した紙片が隠されていることを、つい最近総一郎さんが発見なさったそうなのです。警戒の甲斐なく、まんまと盗まれてしまったそうです……」

「家宝の手鏡の存在は、もちろん知っています」

兵馬は、伊織にちらと好ましくからぬ視線を向けて、

「暗号文の件は、私でさえ初耳です。黒揚羽が盗むくらいですから、何か価値があるものでしょうか？」

さりげない口調だったが、今まで殺人という事態におののくばかりだった目が、貪婪どんらんな光を帯び始めている。

「さあ、それは佐々木さんもわからないと」

菅原は首をかしげる。納得したとは思えないが、兵馬はそれ以上は追及しなかった。

「総一郎さんが眠ってしまわれたのも、黒揚羽に睡眠薬を盛られたためかもしれません。残った飲食物と、使用された食器を調べさせましょう」

菅原は気負って言ったが、ふと声のトーンを落とし、

「黒揚羽の正体は女だといいます。もしかすると、いなくなった雨宮薫という少女が……。真弓さんのお友達だそうです、長年のお付き合いではなく、近頃親しくなっただけなのでしょう？」

「はい。で、でも……」

友人が怪盗かもしれないということがショックだったのか、自分ががめられたと思ったのか、真弓は泣きはらした目に新しい涙をためた。

「あの子は代議士のお嬢さんで、身元がはっきりしています。しか

も、十八歳とおっしゃっていて、実際そのくらいに見えました。黒揚羽にしては若すぎるでしょう」

兵馬が娘をかばうようにあとを引き取る。

「いえ、思い込みは禁物ですよ。身分を詐称するくらい、あの悪賢い女泥棒にはお手のものでしょうし、やつが成人した女性とも限りません。お友達を信じたい、真弓さんのお気持ちはわかりますが……」

菅原は気の毒そうに眉根を寄せたが、

「家政婦の多喜さんによると、ほかにもありという女中が姿を消しているそうなのです。この女中も黒揚羽の一味かもしれません。全力を挙げて二人の行方を搜索し、身元を徹底的に洗い出すつもりです」

再び力強い口調を取り戻す。

「それで、刑事さんは、数馬さんを殺したのは黒揚羽だとお考えなのですか？」

今度は、安達が半信半疑という表情で尋ねた。

「ええ。おそらく、黒揚羽はまりに命じて総一郎さんに薬を盛り、気分が悪いと偽ってひとりしてもらい、鏡を盗もうという魂胆だったのでしょう。ところが、総一郎さんの書斎を出て、縁側から庭に下りるところを数馬さんに見とがめられ、あとを尾けられた。それに気づいたか、あるいは数馬さんが声をかけたかで、黒揚羽は駆け出した。いよいよ不審に思った数馬さんは追いかけて捕まえたが、もみ合いになったあげく殺されてしまった。数馬さんのお召し物には争ったような形跡があり、草履も片方脱げていましたから」

「ですが……あの怪盗は人を殺さないはずでは？」

どこか失望したような口調からして、安達は黒揚羽に好感を持っていたらしい。菅原は、「自分は泥棒を信用するほど甘くはない」という、自信とも優越感ともつかぬ感情を、ちらと目の奥にのぞかせ、

「世間ではそういう噂ですが、所詮は犯罪者です。追いつめられれ

は何をしでかすかわかりませんよ」

それこそ探偵小説に登場する、頭の堅い刑事のような台詞を吐いた。

「もう犯人は決まったも同然、あとは捕らえるだけです。ここにいらつしやる方々にはアリバイもおありですし、招待客のみなさんはお帰りになってかまいませんよ」

菅原の言葉で、張りつめていた空気がようやくゆるんだ。ある者は志摩子や八雲を気になけながら、ある者は恐縮しながらもほつとしたように、またある者は、黒揚羽の名に好奇心を刺激されたのか、いささか名残惜しそうに去っていく。屋敷の者だけが取り残され、座敷はがらんと寒々しくなった。

「君、見かけない顔だが、八雲君のお友達ではないのかな?」

伊織が腰を上げないのを見て、菅原が不審そうに尋ねた。

「え? あの……」

自分の立場を伝えるのに、伊織が気後れしていると、

「中野伊織君じゃないのか?」

どうという風の吹き回しか、横から新田が口を挟んだ。

「は、はい、そうです!」

今まで無口だった新田に話しかけられたのと、名を言い当てられたのとで、伊織はちよつと驚く。

「僕……そんなに有名になってしまっているんですか?」

「ああ。町じゃもっぱらの評判だよ。鈴倉家の跡取りと、昔の恋人との間にできた子供が帰ってきたって」

シニカルな口調ではあったが、「庶子^{しよし}」でも「落としたね」でもない、「昔の恋人との間にできた子供」というやわらかい言い回しに、伊織は自分への配慮を感じた。見かけによらず、根は優しい青年なのかもしれない。

「ああ、例の……」

対して菅原は、差別的な感情からか、伊織が鈴倉家をよく思っていないだろうという憶測からか、どこか冷ややかで疑わしげな目

を向けた。伊織は内心むつとする。

「まあ、よろしい」

そんな伊織の胸中など露知らぬように、菅原は尊大にあごをしゃくってから、八雲と志摩子のほうに向き直った。

「では、みなさんにももう特に質問はございませんし、めいめいのお部屋でもお休みになっていてください。我々は総一郎さんが目を覚まされるまで待機しております」

「わかりました。ではお言葉に甘えて」

志摩子は儀礼的に言うつと、八雲を抱き起こすように立たせた。二人は寄り添いながら頼りなげに歩き出す。八雲に慰めの言葉一つかけられなかったこと、親しくなったつもりでもこういうときは無力だということに、伊織は一抹の淋しさを覚えながら、わざと少し遅れて席を立った。

幕間一 発端

少女は冷たい塀にもたれていた。あざの浮かんだ目元はうずき、同時に気を失いそうなほど空腹だった。それでも、瞳からは一滴の涙もこぼれてはいない。子供ながらの矜持きよつじも多少はあったが、何より泣けば泣くだけ体力を消耗することを、身に沁みて知っているからだった。

少女には両親がいなかった。父は新聞記者だったが、戦時中軍部を批判する記事を書いて逮捕され、獄死した。

少女と母は、当時としては裕福だった親戚の家に身を寄せたが、それができたのは、その家の主人が母の美貌に目をつけ、妾として所望したからだ。その母も、無理がたたって終戦後間もなく病死し、ひとり残された少女は酷使され、虐げられる日々を送っていた。今日も、少女はお茶をこぼしたという些細な失敗から、「しつけ」と称して殴られ、閉め出されたのだ。家の主人が少女を追い出さなかったのは慈悲ではなく、いずれ娼家にでも売り飛ばすか、いつそ母親同様妾にする魂胆だったからかもしれない。

少女は音も立てずに、細く長いため息をついた。

（そろそろ許してもらえるかしら……）

後ろに回した両手で塀を突く。そうでもしないと、足を踏み出す力さえ生まれなかった。

歩きながら、少女はふと一軒の青果店に目を留めた。かごに盛られて店先に並ぶみかんに、視線が釘づけになる。鮮やかな色が頭の中に広がり、甘酸っぱい味を想像すると唾液が湧いてきた。

魔が差したというのか、あるいはこの先少女がたどる人生を思えば、これも運命の女神の思召だったのか――。少女はみかんに手を伸ばそうと身じろぎした。その瞬間、自分を見つめる店主の鋭い視線に気づく。

（迷惑だと思われてるの？ それとも疑われてる？）

いずれにせよ、今ここで万引きなどしようものなら、たちどころに捕まってしまうだろう。

だが、少女はあきらめきれずたたずんでいた。盗もうという明確な意思があったわけではなく、思考が麻痺して動けなくなってしまうような感じがした。

店内には五十がらみの婦人客が一人いた。不器量ではないが、顔つきに陰があり、少女を虐げる主人の妻にどことなく似ている。野菜を手に取ってはべたべたといじくり回し、ためつすがめつ眺めたあげく、返すときは乱暴という、態度の悪い客だった。

彼女を見ているうち、少女の頭にとある策がひらめいた。怪訝な顔を作り、店内に足を踏み入れる。婦人に近づき、

「おばさん、何してるの？」

「え？」

婦人は少女の倍も怪訝な顔をして振り返った。

「何してるって……。あんたこそ何よ？」

嫌悪と不快の念をあらわにして、反問する。

「え、ええと……」

八つや九つとは思えぬほど大人びた性格の少女は、普段ならこんなことでうるたえたりはしないのだが、ここは気弱な子供を演じてみせる。救いを求めるように店主を見た。店主は億劫そうに近づいてくる。

「どうしたっていうんだ？」

少女は婦人から逃げるように、店主の前に進み出て、

「あの……この人が……りんごをたもとに隠すの見ちゃったの」

店主の表情は陰しくなり、婦人は目をむいて、湯気を立てんばかりに顔を真っ赤にした。

「と……とんだ言いがかりだわ！ 何て失礼な子なの！」

少女を指さしながら店主を睨みつけ、

「ちよつとあんた、さっさとつまみ出してちょうだい。いいえ、つまみ出すどころじゃ気が済まないわ。警察に突き出してやりなさい

！

「まあまあ、奥さん落ち着いて」

店主は婦人をなだめにかかった。婦人の言うなりにならなかったのは、店主も彼女の無遠慮な行動を苦々しく思っていたからかもしれない。

婦人の剣幕におびえるふりをして、少女はじりじりとあとずさった。二人の注意が逸れた隙を狙って、みかんをつかむとたもとに放り込む。すぐに駆け出したりしては、かえって盗んだことを公言しているようなものだから、困惑の表情を浮かべながら通りへ戻り、角を曲がる。そこでようやく駆け出した。

無我夢中で走り、力尽きたところで、誰も追いかけてこないことを確認する。路地裏に身をひそめ、しゃがみ込んだ。膝を曲げ背を丸め、ことさら身を縮めたのは、追手に対する恐れか、罪の意識か、あるいは、手に入れたものを誰にも奪わせまいとする意志だったのか。

少女はみかんをたもとから取り出す。たとえ不正な手段で持ち込まれたものであっても、薄暗い路地裏の中でそれだけが輝くように明るかった。

矢も盾もたまらず、少女がみかんの皮に爪を立てようとしたとき、
「こら」

ぴしつと鞭打つような、激しくはないが厳しい声が出た。少女は雷に打たれたように体を震わせ、顔を上げる。見知らぬ男が近づいてくるところだった。先程の青果店の店主ではない。美男子というほどではないが精悍な顔つきで、こんなときでなければかつこいいおじさんだと思ったかもしれない。

迫害されて育ったものの悲しい性^{さが}として、少女は人の気配や機嫌に敏感だった。なのに、男が路地に入ってきたことにも、そもそもあとを尾けられていたことにも、まったく気づかなかったのだ。それも少女の恐怖心をあおった。

少女はみかんを胸に抱きしめ、手負いの獣のように、うなり声を

上げんばかりに男を睨みつけた。と、男はしゃがみ込み、少女をじつと見つめる。その目が不思議と悲しそうなのに、少女はいくらか警戒心をそがれて男を見つめ返した。

「腹が減っているのか？」

不意に男が訊いた。当たり前だと怒鳴り返してやってもよかったのに、男の口調には何か、少女の心を静める力があつた。一瞬ためらったのち、無言でうなずく。

「あの作戦は、おまえが考えたのか？」

「さくせん？」

少女は初めて男に口を利く。

「ああ、すまない。わかりにくかったね。お店の人に、おばさんがりんごを盗んだと嘘をついて、その間にみかんを盗んだやり方だよ」
質問の意図はまだわからなかったが、

「うん」

少女はつい素直に肯定していた。

「ふむ……」

男の目がみはられ、怒りでも悲しみでもない——驚嘆ともいうべき色が浮かんだ。男はあごをしゃくり、何やら考え込んでいるようだったが、

「いいかい、もうあんなことをしてはいけない」

一語一語に力をこめて諭した。少女は当然、盗みを働くこと自体を禁じているのだと思っただが、

「あんなふうに、人を畏にはめたりしてはいけない。同じ盗むなら、もつと正々堂々と盗まなくては」

続いて男の口から飛び出したのは、思いも寄らぬ台詞だった。少女は目を白黒させる。

「おまえには、お父さんとお母さんはいないのか？」

両親の話題を持ち出されて、少女は顔を曇らせた。

「父さんは……警察の人に連れていかれて、帰ってこなかった」

男の顔にやや動揺が走ったのが気になったが、何も言われなかつ

たので、少女はそのまま続ける。

「母さんは……病気で死んじゃった。今はおじさんとおばさんの家にいるけど、みんな意地悪する」

「そうか……」

男は沈んだ声でつぶやいたが、やがて決然と少女を見つめ、

「よかつたら、私と一緒に来るか？ 実を言うと、私も泥棒なんだが自分で決まりごとを作って、貧しい人や優しい人には迷惑がからないようにしている。おまえは賢い子供のようだ。だからこそ、その賢さを悪いこと……いや、卑怯なことに使ってほしくない」

年齢に関係なく、相手を対等な人間として扱っていることがわかる、まっすぐな口調だ。

「それに、お父さんは警察に捕まったと言ったね。私もそうなんだ。泥棒で捕まったんじゃなく、私自身は正しいと信じていたことで……。私には娘はいなかったが、何だか縁を感じてしまったね」

男はずっと手を差し伸べた。実際聡明な少女には、男の言葉の意味は理解できたが、だからといって感動したとか、感謝したとかいうわけではない。ただ、このつらい境遇から救い出してもらえるかもしれない、もっと身もふたもない言い方をすれば、何か食べ物をもらえるかもしれないという希望が、閉ざされていた少女の胸を高鳴らせた。

しばらく考えたのち、少女は男のがっしりした手をつかんだ。

第五章 眞実はいずこ

翌朝の新聞の社会面には、

「黒揚羽、殺人」

の見出しが踊り、鈴倉海産社長殺人事件が大々的に報じられた。

犯行現場が裏門付近の木陰であり、凶器が鉄槌かねてこであつたことを、伊織はそのとき初めて知った。警察では、黒揚羽は金庫を破りに来たのだから、工具の一つや二つ持ってきていたとしてもおかしくない、と見ているらしい。

暗号文の存在も公表され、それを鈴倉家の埋蔵金伝説と結びつけた噂がたちまち広まつた。だが、肝心の紙片は黒揚羽に盗まれてしまい、総一郎と佐々木も内容を暗記してはいないとのことで——そんなはずはないと伊織は思ったが、少なくとも二人がそう言い張つた以上、世の人々は騒ぎ立てる以上のことはできなかったのだ。

あの夜、総一郎は深夜二時ごろ目覚めたが、激しい吐き気と頭痛を訴え、病院に運ばれた。夕方になってようやく落ち着き、むしろ進んで菅原たちの尋問を受けたらしい。だが総一郎は、

「宴会の途中で猛烈に眠くなつた。黒揚羽の仕業だと気づいて佐々木を呼ぼうとしたが、間に合わなかつた」

と答えたくらいで、有力な情報は得られなかつた。ただ、調査の結果、総一郎のさかずきだけ、見た目はそっくりだが底が二重になつた別物とすり替えられていて、その中に薬が仕込まれていたらしいことが判明した。また、三時ごろ多喜が佐々木に淹れたお茶からも、睡眠薬が検出されたが、彼は忙しさにまぎれて飲まずじまいだつたのだという。これはまりが薬を盛つたのだろつという結論に落ち着き、人の好い忠義な家政婦は幸運にも疑われることがなかつた。

また、身元調査の結果、雨宮薫は確かに実在の人物で、下田のホテルで静養中だが、彼女はほとんど外出したことがなく、真弓と近づきになつた少女とは別人だという。父親の代議士が、娘が心を病

んでいることを恥じ、滞在を隠していたため、総一郎にも調べがつかなかったものらしい。まりの場合も、鈴倉家の元女中を探して問いただしてみると、買収されて見ず知らずのまりを幼なじみだと紹介したことを告白した。いよいよ警察は二人への容疑を強め、警視庁からも人を呼んで捜査に力を尽くした。

数日間は数馬の葬儀や、新聞記者への応対でめまぐるしく過ぎ去ったが、その後は鈴倉邸は深い悲しみに閉ざされた。病死や事故死ではなく殺人——それも未解決の殺人であるため、暗雲の垂れ込めたような重苦しさや、やり場のない怒りも加わっていた。八雲は笑顔を忘れて部屋に引きこもり、志摩子は前にもまして陰鬱になった。総一郎でさえ覇気を失い、時折瞳に悲憤を燃やしている。佐々木や多喜はそんな遺族たちを慰めながらも、自分たちも憂わしげだった。ことに多喜は人前では気丈に立ち働きのながらも、陰で涙をぬぐっている様が痛々しい。

予定では七日だった伊織の帰宅は、延期になっていた。本来なら速やかに帰されるべきところだが、万一何か質問する必要があるか、とこのために、しばらくは残っていてくれという、警察の要望があったのだ。

伊織の心にもまた、じわじわと悲しみが忍び寄ってきていた。数馬の、初めて会ったときの真摯な謝罪、いつも漂わせていた淋しげな影、遠慮がちだが慈愛に満ちた眼差しや口調を思い出すと、今頃になって胸を締めつけられる。何となく気まずいまま永の別れを迎えてしまった、こんなことになるのなら、もっと屈託なく話しかけていればよかったと、伊織は後悔にさいなまれた。

もちろん、伊織を落胆させている原因はもう一つあった。数馬被害の容疑者が黒揚羽だということである。

確かに、あの状況では黒揚羽が疑われるのは至極当然だ。外部からの侵入者ということも考えられないではないが、総一郎ならとにかく、数馬を恨んでいた人間など誰にも心当たりはないらしい。夜とはいえまだ薄明かりの残っている時刻だったし、もみ合いまでし

ているのだから、別人と間違えるということも考えがたい。怨恨などとは無関係な居空きや強盗だとしても、さして遅くもない時刻に、わざわざ宴会の催されている家に忍び込む物好きもいないだろう。

自分はあまり無邪気に黒揚羽を信頼しすぎたのだろうか。菅原の言ったように、彼女もまたほかの凡百の泥棒と同様、保身のためなら殺人も辞さないエゴイストだったのだろうか。

（いや……）

伊織は心の中で首を横に振る。約束を守って白昼堂々再訪し、手鏡の秘密を打ち明け、初対面にも等しい自分を仲間に引き入れてくれたあの黒揚羽が、殺人を犯すはずがない。だが、だとすれば真犯人は誰なのだ。

葛藤を抱えて、ある夕方、伊織はひとり姫が浜の海を眺めていた。本当は八雲も誘ったのだが、

「ありがとう。でも……僕はいいよ」

力ない微笑とともに、やはり断られてしまった。食欲がない上に、ろくに眠ってもいないらしい。頬がこけているばかりか、目の下にくつきりとくまが浮かんでいる。

太陽には日中のような容赦ない輝きはなく、暑くはあっても潮風でまぎれる程度の気温だ。ねずみ色を帯びてきた海に、淡い金色の陽光が物悲しく揺れている。

そのとき、背後から小さく激しい息づかいが近づいてきた。伊織が驚いて振り返ると、雑種らしい薄茶と白の子犬が飛びついてくる。その喉元には、何か銀色に輝くものがぶら下がっていた。

手を熱い舌でなめ回され、伊織は呆気にとられたが、

「こらこら、くすぐつたいよ」

すぐに笑って子犬をなでてやった。子犬はちぎれんばかりに尾を振って、キュウンと鼻を鳴らす。

子犬に構ってやりながらも、銀色のものの正体が気になる。伊織は子犬の興奮が静まってきたのを見計らって抱き上げた。その首輪に下がっていたのは、楕円形の口ケツトだ。

（これは……！）

見覚えがあるところではない。黒揚羽が身につけていた、暗号文をしまっていたロケットではないか。

すぐにも中身を確かめたかったが、鈴倉家の誰かが見ているかもしれない。伊織はさも子犬の飼い主を捜しているようにきよるきよるしながら、道路のほうへ上り、草陰に身を隠した。

子犬から首輪を外してロケットのふたを開けると、紙片が入っている。あのとときの暗号文の紙片ではなく、もっと大きい。警察犬ならいざ知らず、こんな子犬にそう複雑な命令を聞かせることはできないだろうから、連れてきた人間が近くにいるはずだが、もう影も形も見えなかった。

心臓の鼓動が全身に響くのを感じながら、伊織は紙片を開いた。

伊織へ

本当は、お悔やみや慰めの言葉を述べるべきなのだろうが、今の
おまえが私をどう思っているかわからないから、やめておく。

私も千里も数馬さんを殺してなどいない。だが、信じてくれとは
あえて言わない。それはおまえの自由だから。

それでも信じてくれるなら、あるいは私の話に耳を貸してくれる
なら、今夜鈴倉邸の皆が寝静まったところ、姫が浜の右手の岩場に来
てほしい。座り込んで海を見ている人のような格好の、一・五メー
トルくらいの高さの岩があるから、それを目印に。

追記 使いの子犬は、おいしいものでも食べさせてから、せいかい青海荘
という民宿に連れて行ってやってくれ。S海水浴場の南側——鈴倉
邸から遠いほうの外れにあるから。

黒揚

羽

鉛筆書きではあるが、大人びた達筆な字で、最後に黒揚羽の紋章が添えられている。

伊織は思わずため息をもらしたが、その意味は自分でもよくわからなかった。とにかく、近くによろず屋でソーセージを買って子犬に与え、S海水浴場まで足早に歩いて、青海荘という民宿を探した。青海荘は、古い平凡な二階家だった。筆文字の味もそっけない看板が、かろうじてここが民宿だと告げている。

「やあ！」

「やあ！」

ちゃんばらでもしているのか、裏から子供たちの甲高い声が聞こえてくる。伊織が子犬を抱いたまま、門の前で戸惑っていると、キューピー人形を横抱きにした四、五歳の女の子が、家屋の陰からひよいと顔をのぞかせた。

「あつ」

声をかけようとすると、女の子は逃げるように姿を隠したが、すぐに棒切れを手にした七、八歳の男の子二人を連れて戻ってきた。彼らの姿を見ると、子犬は息を弾ませてものがき始める。

「ポチだ！」

「ポチが帰ってきた！」

男の子の一人が、棒切れを放り出して両手を差し出したので、伊織は子犬を渡してやった。

「君たちの犬？」

「うーん」

男の子は、鼻の下をこすりながら首をかしげて、
「父ちゃんと母ちゃんはだめって言うけど、ときどきはんあげてるの」

「何日かいなかったから、心配してたんだよ」

年の近い兄弟か近所の友達か、もう一人の男の子も口を挟む。どうやら、黒揚羽は地域の野良犬を借りてきて手なずけたらしい。

「こら、ポチ、そんなになめるな。べとべとだよ」

「お兄ちゃんばかりずるい。あたしにも貸して」

血なまぐさい殺人事件のことなど知らぬげに――あるいは知っていてもかけ離れた世界にいて、子犬と戯れる子供たちに、伊織の心は和んだ。子犬に口の中で小さく礼を言つて、そつと青海荘を去り家路をたどる。

味などわからないながら夕食をとると、伊織は部屋で黒揚羽の手紙を幾度となく読み返した。

考えたくないことだが、のこのこ出かけて行つて、万一黒揚羽に伊織を害する気でもあろうものなら、まさに飛んで火に入る夏の虫だ。だが、このまま黙殺すれば激しく後悔し、胸に^{おり}澱のようなわだかまりが残り続けるに違いない。

（ここへ来て逃げるなんて、情けないよな）

手紙を胸に当てて、伊織は心を決めた。

真夜中、伊織は裏門から屋敷を抜け出し、姫が浜へ向かった。半月よりややふくらんだ形の澄んだ月が、漆黒の夜空にぽっかりと浮かんでいる。海に映った幻の月は、さざなみによって無数の光に裁断され、銀鱗^{ぎんりん}のようにきらめいていた。聞こえるのは波音と木々のざわめきばかり。

伊織はふと不思議な気がした。父を殺した容疑者である怪盗に呼び出されたという状況も、小心者だと思ひ込んでいたはずの自分が故郷を遠く離れた土地の夜の砂浜を、こうしてひとり平然と歩いていることも――。

目印の岩には心当たりがあつた。八雲と遊んでいるときに目に留めたことがあるのだ。丸めた背中のような曲線のある大岩に、顔のような凹凸^{おうちつ}のある小岩がのつていて、確かに「座り込んで海を見ている人」のように見える。だが、場所の見当はついていいるとはいえず、夜に岩場を歩くというだけで、結構な体力と氣力を費やした。たどり着いて息をついていると、

「伊織」

背後から聞き覚えのある声が呼んだ。後ろの崖に小さな洞窟がある。そこら黒揚羽が身を乗り出して、

「こつちだ」

それだけ告げて、黒揚羽は顔を引つ込めた。

洞窟の入り口は、一人がようやく通れるくらいだった。中は開けて部屋のような空間になっていたが、それでもせいぜい三畳くらいの広さだ。すみにちよこんと千里が座っていて、

「来たんだ……」

伊織を見上げて、意外そうに、どこか呆然とつぶやいた。

蠟燭の火が岩肌を黄金色に照らし、濃淡に富んだ陰影を作って、秘教の儀式のような荘厳だが妖しい雰囲気をかもし出している。こんなところで暮らしているのだろうか、と伊織が見回していると、「ここが隠れ家ってわけじゃないんだ。灯台もと暗しで案外名案かもしれないが、さすがに窮屈だし不便だからね」

伊織の心を読んだように、黒揚羽がぽつりと言った。伊織はそれには言葉を返さず、

「これを……」

代わりにズボンのポケットから、例のロケットを取り出して差し出した。重い話をするきっかけを作るには、簡単なことから始めるにかぎる。

「ありがとう」

黒揚羽はすつと受け取り、首にかけてシャツの中に隠す。伊織は思いきって、

「黒揚羽。僕には、君が人殺しをするとはどうしても思えない。聞かせてほしいんだ、あの夜のことを詳しく」

一息に告げた。

「ああ。言われるまでもないさ」

黒揚羽は深くうなずいた。

「おまえにも想像はついたかもしれないが、私たちの作戦では、総一郎と佐々木を薬で眠らせ、私は体調を崩したふりをして座敷を抜

け出し、暗号文を盗み出すというものだった。頭をしぼったのは、どうやって睡眠薬を盛るかということさ。あらかじめ酒や料理に混ぜておいたのでは、ほかの人々にも効き目が現れて騒ぎになってしまふし、宴が始まってからは機会がない。結局総一郎のほうは、特別な細工のあるさかずきに睡眠薬を仕込み、佐々木のほうはお茶に入れることにした。もちろん、あの家政婦に三時のお茶を淹れるよう誘導したのは千里さ。運悪く、佐々木のほうは失敗してしまったが……」

「ごめんなさい、お姉さま」

千里が神妙にこうべを垂れる。

「そういつつもりで言ったんじゃないよ。おまえは精一杯やってくれた」

黒揚羽は千里の頭にぼんと手を置いた。千里はまだ引け目を感じているようだだったが、面映ゆそうに顔をほころばせる。

「佐々木に変化がないことは気になったが、私は計画どおり総一郎の書斎に侵入した。大勢の人が集まっているんだ、この前のようにならず者を雇うとか銃を使うとか、目立つことはしたくないだろう。ならば佐々木ひとりが起きていても、対処できるという自負があったからね。書斎には毒針程度のしかけはあったが、そんなものに引つかかる私じゃない。無事金庫を破ると、中には貴重品や書類に混じって、鏡と古びた紙切れが収まっていた。ただ、一つ気になることがあってね」

「何なの？」

伊織は初めて口を挟んだ。

「伊織は暗号を……いや、数学の問題でもいい、そういうものを解くとき、頭の中だけで考えるか？」

黒揚羽は逆に質問を返す。

「いや、紙に書いて考えるよ」

「だろう？ 総一郎だってそうしたはずだ。なのに、金庫の中には手帳やノートがなかった。総一郎が肌身離さず身につけている

のかもしれないが、だったら暗号文そのものも一緒に持っていそうなものだ。些細なことだが引っかけかね、紙切れをじっくり観察してみると、伊織の預けてくれた暗号文の文字より墨の色が鮮やかだし、筆跡も少し違うんだ」

「それは……偽物ってこと？」

「ああ。似たような古い紙を探してきて、^{ていさい}体裁や筆跡を真似て、内容だけでたらしめなものに変えたんだろう。私に金庫を破られても、あざむくことができるように……。用意周到なことだよ」

「じゃあ、本物はどこに？」

「金庫の底が二重になっていて、そこに隠されていた。解説に使っているらしい手帳もね。私はさかずきの底に睡眠薬をひそませ、総一郎は金庫の底に暗号文を隠した。面白い偶然だよ」

黒揚羽は皮肉っぽく笑ったが、

「暗号文はあとで見せるよ……おまえが望むなら」

すぐに神妙な声で付け加えた。

「私は紙切れと手帳を懷に収めておさらばし、同様にこっそり屋敷を抜け出していた千里と落ち合った。事件が起こる前だったのか、数馬さんが殺されたことは二人とも知らなかったんだ。報道によれば、数馬さんが倒れていたのは裏門の近くだそうだが、私たちは表門から出てしまったしね」

「危ないと思わなかったの？」

「いや……。書齋に出入りするところをさえ見られていなければ、表門から出ようが裏門から出ようが同じこと、いくらでも言い逃れできるさ。そして鈴倉邸を出てしまえば、人目を忍んで逃げる必要もない。鈴倉一族と招待客以外の人間に、表を歩いているのを見られたところで、別段困ることはないんだから。それに、車で来ていたから道路側に出たかったんだ」

伊織が再び黙り込んだのを見て、

「これで私の話は終了だ。あとの判断はおまえに任せる。私との関係を断つもよし、今までどおり宝探しに参加するもよし」

黒揚羽は、そっけないほどさばさばした口調で締めくくった。傍らでは、口を挟みたいのを我慢するあまりだろっ、千里がほとんど睨むように伊織を見つめている。

伊織の心は不思議と屈ないでいた。ていのいい作り話ではないか、と怪しむことはできるが、そんな気持ちにはならなかった。ここに来ると決めたときから、無意識のうちに結論は出していたのだろう。「信じるよ」

まず黒揚羽に、次に千里に向かって力強くうなずいてみせる。

「見直したわ、伊織さん！」

千里がぱつと顔を輝かせて、両手を組み合わせた。

「ありがとう」

黒揚羽もはにかむように微笑んで言った。凜とした美しさの中に、初めて年相応に可憐な一面が顔をのぞかせる。

「仮に……仮にだよ」

二人の感情を害さないように、伊織はその言葉を強調して切り出す。

「君たちが父さんを殺した犯人だとして」

今だけでも数馬を「父さん」と呼ぼう。あきらめてはいたとしても、生前数馬は伊織からそう呼ばれることを望んでいたかもしれないのだから。

「僕は放っておいても害のない存在だ。犯罪の証拠を握っているわけでもなし、君たちの隠れ家や今後の行動を知っているわけでもない。暗号文の内容も半分しか知らないから、たとえ僕が君たちに裏切られたと思っても、単独で宝を探すことはできないよね。だから、僕をこうして呼び出す理由なんかないんだ。裏を返せば、あんな手紙をくれるということ自体、君たちが犯人じゃなくて、本当に僕の誤解を解きたいと思っている証拠じゃないだろうか」

繰り返し考えたことだけあって、すらすらと言葉が口をついて出る。それはこんなときでも悪い気のするものではない。容疑者を一いち堂どうに会かいして推理を披露する名探偵の気分が、少しだけわかった。

「それに、あの日の署長さんの推理にも、無理があると思ってさ」

伊織は菅原の推理を手短に話して聞かせると、

「署長さんは、君が書斎を出るのを見かけた父さんが、怪しんであとを尾けたって言うてたけど、だったらどうして父さんは草履を履いていたんだ？　そういうときって、履物を取りに行くより、まず追いかけるものじゃない？　そもそも、招待客の一人が不審な行動をしてたとしても、こっそりあとを尾けるってのはちょっと不自然だよ。そんなことをする前に、普通はまず声をかける」

ちよつと息をついで、

「署長さんの推理とは違うけど、祖父が眠らされて味方が必要だと思った佐々木さんが、父さんにすべてを……君のことや暗号文のことを打ち明けて、金庫を見に行くよう頼んだってことも考えられる。君を追いかけやすいように、父さんは玄関で草履を履いて、外から書斎に近づいたのかもしれない。でも、その場合、逆に父さんが祖父のそばについて、佐々木さんが書斎に行くほうが自然じゃないかな。二人の立場を考えるなら。あの佐々木さんが、鈴倉家の長男の父さんに、怪盗が忍び込んでいるかもしれない書斎を見に行かせるなんて……そんな危険なことをさせるなんて思えない」

「なるほど、よく考えたな」

黒揚羽は、一所懸命問題を解いた生徒を見る教師のように、満足げに微笑んだ。

「だけど」

伊織は二つの理由から頭をかいた。一つは黒揚羽に認められた嬉しさから、もう一つはこれから気取ったことを言おうとしている恥ずかしさから。

「最終的に僕が君たちを信じることにしたのは、理屈じゃないよ。だって……信賴って頭じゃなくて、心で作るものだから」

黒揚羽と千里は目をしばたいた。

「きざな台詞ねえ。今時お芝居でもそんなこと言わないわ」

千里が顔をしかめ、大袈裟に呆れ返る。

「こらこら、あんまり伊織をいじめるなよ。私だって同じようなことを言うじゃないか。頭で解決できないことは、直感で判断しろってね」

黒揚羽が苦笑してたしなめる。かばってくれるのは嬉しいが、決して年下の少女にいじめられているわけではないと思いたい。

「そりゃあそうだけど……」

千里は口の中でもごもご言い、上目遣いに黒揚羽を見上げる。黒揚羽は千里の膝を優しく叩いてから、

「光栄だよ、伊織」

伊織に晴れやかな顔を向けた。伊織も笑い返してうなずいたが、すぐに真顔に戻り、

「でも……真犯人は誰なんだろう？」

最大の疑問を口にした。

「私もずつと考えている。まず、私が席を立つてから、警察が来る前までの話を聞かせてくれないか？」

「ああ……そうだったね」

要望に応えて、宴の終わりごろ、数馬が席を立ったこと、兵馬が捜しに行ったが見つからなかったこと、兵馬と安達が再び捜索し、庭で殺されているのが発見されたことなどを話す。

聞き終わると、黒揚羽は腕組みをして、

「前提として、外部犯の存在は考えないことにしよう」

「それじゃわかるはずないものね」

「ああ。まず、どうして数馬さんが席を外したのか、考えてみる必要があるな。兵馬には、総一郎の様子を見てくると告げただって？」

「うん。佐々木さんも、実際部屋に来たって言ってたらしい」

「その数馬さんが、なぜ庭の裏門付近などにいたのか……。あらかじめ誰かに呼び出されていたと考えるのが、いちばん自然なんだが」

「僕もそう思う。もしかしたら、どっちも真実なのかもしれない」「というと？」

「たった数日間の付き合いだけどさ、父さんってとても優しくて正直な人に見えたんだ」

「おまえの父親なものな」

「え……？」

「いや、独り言だ。先を続けてくれ」

独り言と言われても、はつきり聞こえてしまった。照れくさかったが、伊織は気に留めぬふりをして、

「うん。だから、呼び出された場所に行く前に、実際に寝室をのぞいてみようと思ったんじゃないかな。それを口実に席を立ってるから、実行しないと後ろめたい気もしたのかもしれない」

「ふうん、一理あるな。よし、そう仮定して推理を進めよう」

黒揚羽は膝を打って、

「いずれにせよ、数馬さんが席を立つてから遺体で発見されるまでの時間、一歩も座敷を出なかった人物は除外される。鉄槌で人を撲殺するというのは、機械じかけなどでは難しいし、仮にできたとしても装置を回収する作業が必要だからね」

「とすると、残るのは、佐々木さん、叔父、安達さん」

伊織は指を折りながら挙げていく。

「あとはお多喜さんほか、使用人の人たちだね。祖父も……含まれるんだろうか？」

いかに総一郎が非情でも、我が子を――伊織にとっての父を殺めたとまでは思いたくない伊織は、ためらいがちに訊いた。

「一応外さないでおこう。実は睡眠薬の存在に気づいていて、飲んだふりをして狸寝入りしていた、という可能性もなきにしもあらずだからね。おまえにとっては……違う意味では私にとっても不本意な可能性だが。やつのほうが、私より一枚上手だったということなのだから」

「うん。でも、ここからどうやってしぼる？」

「そうだな。犯人は私があることを知っていたと思う。何も知らずに数馬さん呼び出して殺害したら、予期せぬ偶然で私に疑いがか

けられた、ということも考えられるが、するとどうしてあの場を殺人の舞台に選んだのかわからない。庭はともかく、邸内には大勢の人が集まっていたんだ。殺人そのものを目撃されなくても、庭に出るところをでも見られたら一巻の終わりだ。何でもない日に、屋敷外の無人の場所に呼び出して犯行を遂げたほうが、よほど安全だよ」

「つまり、計画的に君に罪を押しつけたってことだね？」

「ああ」

「すると……怪しいのは祖父と佐々木さん？」

「状況だけを見ればね。だが、ここが難関なんだが、あの二人には動機がない。……千里」

置いてけぼりを食って、所在なさに地面を指でなぞっていた千里だが、不意に名を呼ばれてきよと顔を上げる。

「総一郎と数馬さん、あるいは佐々木と数馬さんの間に、特に軋轢あつれきがあるように見えなかったって？」

確かに、鈴倉家の内情は、女中として入り込んでいた千里がいちばんよく知っているはずだ。

「ええ。数馬さんは人といさかいを起こすような性格じゃなかったもの。だからこそ、総一郎は歯がゆく思っていたみたいだけ……言っちゃ悪いけど、あきらめていたのかしら。何かもめことがあるようには見えなかったわ」

「会社でも、数馬さんは肩書きだけの社長で、実権は未だ総一郎が握っていたらしいな」

「でも、祖父は自分の死後はどうするつもりだったんだろう？」

「優秀な補佐役がいるらしいから、その男に任せるつもりだったんだろう。あとは八雲君に期待をかけているのかもな」

伊織は気が重くなった。あの屈託のなかった少年は、父を殺されて悲しみのどん底に突き落とされ、今後いや増すであろう、一族からの重圧に耐えて生きていくのか。

「で……」

伊織の顔つきを見て、千里が珍しく控えめに口を開いた。

「佐々木にも動機はないと思うわ。あの人は父子二代で鈴倉家に仕えていて、総一郎にはもちろん、数馬さんにも忠誠を誓ってたわ。数馬さんが子供のころは、お兄さんみたいによく面倒を見てたそうよ」

「じゃあ、逆に動機のある人物は……？」

伊織が質問とも自問ともつかぬ調子で言うと、黒揚羽と千里は目を見交わした。二人の間でも話題に上ったに違いなく、同じ人物を思い浮かべているようだ。それが誰かは、伊織にもたやすく予想できなかった。

「そりゃあ」

千里が目吊り上げて、

「兵馬に決まってるわ！ あの人のいやらしいのよ。人前……特に総一郎の前じゃ殊勝な顔してるくせに、陰では人の悪口や愚痴ばっかり。使用人の扱いもひどくて、八つ当たりしたり、些細な失敗でもねちねちいやみを言ったり。おまけに、可愛い女中には見境なくちよっかい出すの。あたしだってお尻なでられたのよ」

多分に私怨が混じっているようだが、そして、間接的に自分のことを「可愛い」と形容しているが、今度ばかりは伊織は千里に同情した。まったく低劣極まりない男だ。

「あの人が内心父さんを邪魔者扱いしていたのは、僕も知ってる」

鈴倉邸初日の風呂上がりの一件を思い出しながら、伊織も沈んだ声で言った。

「でしょう？ 今回、予告状は郵便受けに入れてあったわ。手紙を回収するのは佐々木の役目だけど、誰でも見ようと思えば見られたはずなの。偶然か故意かはわからないけど、お姉さまが盗みに入ることを兵馬が知っちゃって、これ幸いとばかりに、日頃からうとんじていた数馬さんを手にかけたとしても不思議はないわ」

「それに、兵馬は先にひとりで数馬さんを探しに行っている。自然な行動ではあるが、もっとも好機に恵まれていたことも事実だ」

黒揚羽が冷静に補足する。

「どうして郵便受けをのぞいたのかという疑問は残るが……。ここは一つ、兵馬の動向を探ってみることにしよう。濡れ衣を着せられたままで黙っているわけにはいかない」

黒揚羽は鋭い目で地面を見据えてから、ふと顔を上げて、

「おまえも、今後は彼にも気をつけるように」

「うん」

兵馬の小ずるそつな顔を思い浮かべ、伊織はこぶしに力をこめた。

「ところで……おまえは宝探しを続けるのか？」

不意に、黒揚羽は真剣に、そのくせ妙に遠慮がちに訊いた。

「それは……父さんが殺されて、そんな気分にはなれないかってこと？」

「ああ」

黒揚羽はぽつりと答えた。伊織はしばし地面に目を凝らして、

「もちろん、僕だって悲しんではいる」

「どう言えば自分の気持ち伝わるか——。言葉を探しつつ語り出す。」

「だけど、宝のことも、父さんが殺されたのも、一連の流れの上にあるわけだろう？　すべての真相を知って初めて、僕はこの事件と向き合ったといえる気がするんだ。それも、ただ君たちの報告を待つだけじゃなく、一緒に行動を起こすことで……。確かに、今までみたいな、単純な好奇心とか子供っぽい冒険心もないとはいえないけど」

「なるほど、いい心意気だ」

黒揚羽が、感心と安堵の入りまじったような口調で言った。千里も今度は、きざだの何だのと茶々を入れたりしない。

「じゃあ、暗くて読みにくいとは思うが、早速……」

黒揚羽は、腰にさげている革袋から紙片を取り出した。新しいものと古いものが二枚ずつある。

もおおつじおのならちいにすみいしいをすまわしこよおこつ
でつんきとろのかしく

こちらはおなじみ、伊織が持っていた紅梅の鏡の暗号文だ。

しだきにのまにはづいのわのわむびのわのわむべじりとろりやま
まじけゆしこちなごや

そしてこちらが、黒揚羽が総一郎から盗んだ白梅の鏡のもの。二
度じっくり目を通してから、

「君はもう解けたの？」

顔を上げて尋ねる。

「ああ」

黒揚羽は余裕たつぷりに微笑んだ。

「うーん……」

挑戦しないまま答えを教えてもらうのも悔しく、伊織は暗号文と
にらめっこを始めた。逆さに読む、文字を飛ばして読むというのは、
初めて紅梅の鏡の暗号文を目にしたときに試してみたし、二つがそ
ろわなければ解けないという以上、何らかの形で両者をつなげるべ
きなのだろう。

「文字を特定の字数で分けて、交互に並べてみようか。一文三十九
文字だから、三で割ってみるとして、『もおお』『しだき』『つじ
お』『にのま』……」

黒揚羽に鉛筆を借り、紙片の裏に書き出す。

「全部で二十六行、右から左に読むと、もしつにのにちいいのみび
いのまべことこやつじとしか……だめだ、意味が通じない。左
から右に読むと、なかしとじつやことこ……これも違う。いっそ下
の列から読んで、おきおまらづにわすむ……」

伊織が頭を抱えているのを見て、

「いい線まで行っているんだがな、考えすぎだ」

黒揚羽が苦笑する。

「もつと単純に。特に初めのほうをよく見てごらん」

言われたとおり、伊織は冒頭の三、四文字を集中して眺めた。と、不意に目の前が晴れたような気がした。

「しもだおき……」

答えが口をついて出る。

「おにつのじまおにのはなづら……」

「そう！」

黒揚羽が手を打ち鳴らした。

「何だ、ものすごく簡単じゃないか。白梅紅梅の順で、一文字ずつ交互に読むだけなんて」

伊織は拍子抜けして嘆息する。

「よく言っわ。悩んでたくせに」

千里が下唇を突き出したが、伊織は相手にしない。愛想を尽かしたわけではないが、気が急いていたのだ。

「いちのいわにのいわをむすび、みのいわしのいわをむすべ、まじわりしところより、おやこまつまでじつけんゆきしところ、ちのながごしやく」

残りを解読して読み上げる。

「ああ。漢字に直すと、おそらくこうだね」

黒揚羽が、もう一枚革袋から紙片を出した。

下田沖鬼角島鬼の鼻面、一の岩二の岩を結び、三の岩四の岩を結べ
交わりしところより、親子松まで十間行きしところ、地の中五尺

「この『鬼角島』っていうのは？」

文字を指さしながら、伊織は黒揚羽に尋ねる。

「下田港から南に十五、六キロの海上にある、外周四キロほどの小さな無人島だ。角が二本生えたような形状から、その名がついたらしい。船さえ調達できれば、正味しょうみ一時間もかからずに行けるだろう

が、問題は、おまえに行動の自由が利かないことだね。今の状況で、丸一日外出するのは難しいだろう？」

「うん。気軽に遊びに行けるような雰囲気じゃない」

「当然だな。さてどうしたものか……」

黒揚羽は親指の腹を唇に押し当て、しばし考え込んでいたが、

「伊織、帰る日付はもう決まってるのか？」

「ううん、まだだよ。七日の予定だったけど、警察が残るように言ってるらしくて……。東京の父さん母さんには、決まりしだい連絡することになってる」

「好都合だ。じゃあ、明日……いや、もう今日か、私がおまえの母さんのふりをして、鈴倉邸に電話をかけ、急事が生じたから、できるだけ早く伊織を帰してほしいと頼む」

「えっ、そんな……。佐々木さんが出たらどうするの？ あの人には母さんの声を知ってるんだよ」

「案じるな。私だって、おまえの母さんの声は聞いたことがある」

黒揚羽はこほんと咳払いをして、いたずらっぽく目くばせすると、「夏休みの宿題ため込んだじゃだめだって、あんなに言っただじゃない、伊織。母さん手伝いませんからね」

声色を遣ってみせた。はきはきしてやや早口で、年のわりに若々しい、由紀子の声の特徴を見事にとらえている。

「すごいよ！ 二言三言しか聞いてないのに、よく真似できるなあ」伊織は感心して手を叩いた。一瞬由紀子に叱られたのかと錯覚してしまったくらいだ。

「さすがお姉さまだわ」

千里も誇らしげに褒めたたえる。一度会ったきりの佐々木をたますには十分すぎるできばえだ。

「……でも僕、宿題は計画的にやるよ」

「ああ、そういう性格だろうと思う。いかにも母親が言いそうな台詞を試してみただけだ」

わざととぼけたつもりだったが、黒揚羽はそれを知ってか知らず

か真顔で応じて、

「さて、そうすれば今日明日中に出発できる。ところで、伊織はどうやって鈴倉邸に来た？」

「交通手段のこと？　伊東までは東海道線の準急で、そこからはバスだよ」

「佐々木も一緒だったか？」

「うん、東京駅からずっと」

「そうか。もし、帰りも佐々木がバスに同乗するようだったら、何とかして追い返せないか？」

伊織はちよつと思案して、

「やってみるよ。気疲れしたから一人になりたい、ってほのめかすとか」

「その調子だ。佐々木もさすがに停留所までは見送るだろうから、バスには乗らざるを得ないな。じゃあ、次の停留所で降りて待つていてくれ。迎えに行くから」

「つまり、帰るふりして君たちと合流して、引き返すんだね？」

「そうだ。おまえのご両親には、電報を打って四、五日あとの日付を教え、その日に帰ることにすればいい。そうすれば、その四、五日分は余裕ができる。逆に鈴倉邸には、時刻を見計らって、再び私がおまえの母さんの声色で電話しよう。伊織が無事帰宅したとね」

「で、いよいよ宝探し開始だね」

「ああ。ほかに話し合っておくべきことはないと思うが……。船や宿や道具は、私たちが手配すればいいし。手はずは覚えたか？」

「大丈夫だよ」

深夜とはいえ、留守がばれないという保証はない。名残惜しかったが、伊織は二人に別れを告げ、来た道を引き返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236x/>

怪盗黒揚羽

2012年1月13日01時50分発行